

第二十四號

文明之母第二十四號目次

本誌は每月二回三日十八日に發行す

本誌は前金に非されば發送せず

本誌の定價は一冊金六錢十二冊半年分金六十八錢廿四册一年分金一圓卅錢

全國無遞送料

本誌の廣告料は「五號活字二十三字詰」當り左の如し

	(壹回)	(二回以上)
壹行	金八錢	金七錢
三十行以上	金七錢	金六錢
六十行以上	金六錢	金五錢

本誌の見本は郵券六錢を送らるれば呈す

本誌代金御回送の節は內國通運早達便又は東京郵便局へ御振込被下度

郵券代用は一割增

本誌の前金將に相切れんとする時は其卷の宿所姓名を朱書して發送すべし

版權所有

主筆 大矢森之助

編輯兼發行人 中村一 東京深川區諸町十三番地

印刷人 小西石造 東京深川區仲町八番地

發行所 東京日本橋區大傳馬町二丁目貳拾貳番地 生文社

特別大賣捌

東京本郷區元富士町 盛春堂
仝京橋區彌左衛門町 嚴々堂
仝日本橋區小網町四丁目 信文堂
仝 新聞會社
仝京橋區三十間堀一丁目 瓦明堂出張店
仝神田區佐柄木町 東海堂
仝日本橋區本石町四丁目 指金堂
埼玉縣鴻巣町 長島本店

大賣捌

埼玉縣越ヶ谷町 協立舍
仝所澤 尚文堂
仝浦和町 文華堂
仝熊谷町 近榮堂
仝川越町 水村岩三郎
仙臺國分町 三友社
越中富山 真田善二郎
秋田 本間金之助

神奈川 吉川伊兵衛
名古屋 永樂屋
大坂 松村九兵衛
仝 前川善兵衛
和歌山 平井文助
出雲松江 盛進堂
熊本 長崎二郎
仝千反畑 文明堂

文明之母第二十四號



明治二十三年五月三日發兌

○日本現時の一怪現象

亞米利加の戰艦一たび太平洋の激浪怒濤を破ッて、我が春夜の長眠を攪破してより、我が邦の外交是れより開け、泰西の新文物は奔馬の勢を以て、我が內地に闖入し來れり。泰西の文物入り來ッて、百般の事皆改良の緒よ就き、發達上進を見しもの一にして足らず、誠に賀すべきなり。然りと雖も、一利あれば一害ありといふ忌まはしき古語に洩るゝ能はざるか、發達上進せざる可からざるものゝ發達上進するは、實に祝賀すべきなれども、之と同時に又發達上進す可からざるものゝ發達上進するあるは、誠よ慨嘆に堪ゆざるなり。試に思へ、吾人の最も厭忌する卑劣心の如き、近頃實に驚くべき程の長足の進歩をなしたるよあらずや。或人曰く、卑劣心の發達は勿論厭ふべし、然れども泰西人

と交際したるが爲に發達したりとはいふ可からずと。吾人曰く否々我が日本民族には古來厭ふ可き卑劣心は甚だ尠なかりしあり、是れ歴史に考ひ事實よ徴して敢て疑ふ可きにあらず。其の發達進歩して今日の如くに至りしは實に泰西人と交際したるに依る、其の原因たる種々ありと雖も、今茲に說明す可きにあらず。

兎に角最も厭ふべき最も忌むべき卑劣心は、駸々として進歩したり、發達したり、是よ於いて乎、また幾多の奇々怪々なる現象を社會に觀るよ至れり。吾人は今其の一に就いて聊か茲に說くあらんとす。

茲よ一學校の開校ありとせよ、而して其は私立學校なり。然るに其の開校式よは有名なる官吏、厳めしき貴顯を招待して、民間の新聞記者、雜誌記者に及ばざること往々にして然り。其の生徒卒業式などに於いても然らざるはなし。會社銀行などの開業に於いても、苟くも立派なる式といへば、多くの貴顯を招待するなり、多くの官吏を招待するなり。果ては遊廓の開業式にして、十大臣の臨式を望むあるに至れり。豈に奇々怪々なる現象にはあらざるか。吾人嘗て地方に在りし時、或る織物會社の設立に就き盡力したることあり、準備全く整ふて、イザ開業式を擧行せんとするに當り、創立者の一人は縣知事の臨式を得んことを語り出でたり。乃ち其の手續きを町役場に問合せた

るに願書を差出さゞる可からずとの事なり、――何卒御臨式下され度奉願候也、といふ願書を差出さゞる可からずとの事なり。其を聞きて同じく創立者の一人は、然らば縣知事の臨式を得ざることにせん、何も願ひ奉ッてまで請ふにも及ぶまじ、縣知事來ればとて開業式に光彩を增すにもあらじ向後事業の隆盛を致すにもあらじ、縣知事に與ふる丈の酒食あらば、實業者――機業者を一名も多く招待するに若かざるべしと。一坐の諸衆皆然り々々と同じて、竟に縣知事を招待せざることゝせり。實に斯くあらねばならざるなり。然るに都人士は卑劣心の非常に强きが爲めか、如何なる事にても、如何なる場合にても、前述の如くに立派なる貴顯、立派なる官吏の臨場を望むは、實に驚嘆の外なきなり。

是れより聊か讀者諸子に密接する事物に就いて觀察を下さん。讀者諸子は必らず記臆せらるゝなるべし、國の基(今は已に廢刊せり)なる婦人雜誌の發刊の際の廣告文を。堂々たる學者の名は好し、之に冠らするに何位、何爵、何官と、學術界には毫も緣故なきものを以てし、殆んど二三十名も綺羅星の如くに書き並べありたり。或人の官員錄を讀むが如し、と評せしは實に能く穿てりといふべし。嗚呼學術雜誌の發行に斯かる現象ありとは、咄々怪事にはあらざるか。

又本號の彙報欄にも記載しあるが如く、這度創立になりたる女子教育獎勵會なるものあり。吾人は如何なる人の首唱に出でたるやを知らず、然れども徹頭徹尾、貴族的にして、國の基の發刊に尙數層の目覺しきを致せり。試に其の會長、副會長の姓名を擧げんか。

會長　北白川宮殿下

副會長	熾仁親王殿下御息所	同	彰仁親王殿下御息所	同	貞愛親王殿下御息所
同	能久親王殿下御息所	同	三條公爵夫人	同	黑田伯爵夫人
同	伊藤伯爵夫人	同	西鄕伯爵夫人	同	大山伯爵夫人
同	榎本子爵夫人	同	土方子爵夫人	同	後藤伯爵夫人
同	毛利公爵夫人	同	岩倉公爵夫人	同	柳原伯爵夫人
同	鍋島侯爵夫人	同	蜂須賀侯爵夫人	同	花房(義質)夫人
同	渡邊(洪基)夫人	同	岩崎(彌之助)夫人	同	澁澤(榮一)夫人

等の如し、豈に奇怪なる現象にあらずや。

嗚呼人漸く卑劣に陷りて、諺に所謂虎の威を借る狐ならざるものなし。吾人は不肖なりと雖も、いたく是れ等を賤しむ者なり、自主を以て自任するものなり、獨行を以て自誇るものなり。噫吾人を知る者は誰ぞ。



〇こどものため（承前）　醫學士　近藤常次郎

偖此れより小兒の病氣の二三に就いて説かん。小兒病中世間で最も恐ろしく思ふは腦膜炎と實扶的里なり。病氣と云へば已に恐ろしきものなるが、此の二つの者ほど恐ろしく感ずる者はあるまじ、名を聞いてさへ已に戰慄する位、吾が最愛の小兒が此の病氣に罹りし時の父母の心中如何程苦しき者にや、思ふよも猶餘りあり。過る日吾家に訪れし某氏の妻君、六年許の愛らしき女兒を伴ない、診察してと乞ひし。其容躰を聞くに尋常の感冒の如く思はれしが、診察して見れば是は如何に、咽喉に白き義膜二つ三つ、偖は實扶的里か、其疑ひあれとも一診して直に斷言するとは出來ず、故よ余は母親に向ひ、病氣は一と通りの感冒ならず、然し病名は猶一度診察せねば確と下し難し、如斯々々の療養せよと告げたり。母親承知して歸宅せし後、五六時間を經てか、父なる人來り

て余に猶一層病名を明してよと乞ひたり。余は有の儘に或は實扶的里なるかも料り難し然し此に類似の病氣もあれば今日は斷言し難しと答ふ。翌日は早朝使來りて來診を乞へり。余は直ちに其家に至り、昨日よりの容躰を問ひ、偖患者を診察したり。此時の有樣、父母の此時の有樣は何如なりしぞ、彼れ女兒の父母は眸を凝して吾が方を見詰め、吾が一擧一動に注意し、余の診察し終りて手を拭ひし折、勢ひ込んで病症は何如にやと問ひ詰めたる氣色、余が實扶的里なりと答へし其時の樣子、余は何と說かん言葉も無し。余の答へを聽きて、熱涙の滴々として眼瞼をつたわりし時は、余も不覺愁然として手を拱きし儘……

又或る日余に診察を乞ひたるの母氏あり、二年許の一兒を抱きて氣遣しげに腦膜炎にあらずやと問ひし。其樣子を聞くに食事も尋常、氣分も活潑、大小便ともに變りなし、而して躰格もよし、至ッて强壯の方なり。余は診察し終りて、決して左る事なしと答へしが能く聞けば六七日以前の夜偶然烈しく號泣して夜を徹せり、或は腦病にやと疑ひし人ありし由なり。母氏の曰く、腦病に非ねば大に安堵せしが、念の爲め服藥したしと。余は今服藥するの必要なきを說き、懇に養生の事を說明したりし。母氏もさらばとて吾門を出でしが、顏色稍ゝ不滿の色ありし。跡にて考ふれば藥劑を與へぬ爲なりしと

思はる。

小兒を撫育する父母の情愛は、なんと至廣至大の者に非ずや。腦膜炎にても無きに服藥したしと乞ひ、實扶的里と聽きて飲泣す。世間は廣きも此の情愛に二つなし。斯程迄大切なる小兒なれば、其養生看護等は十分行屆きてあるべき筈なるに、世間にはわざ〳〵求めて病氣にさせる者あり。又求めて病氣を重らせる者もある。斯かる人々若し此言を聽かば、何んの馬鹿なと嘲笑し玉はんが、決して一笑に附するなく能く吾等が述ぶる言を玩味し玉へ。吾等は世の父母を罵到せんとて、兎や角言ふ者には非らじ。吾等は小兒養育上、默視し難き者あれば、世の忌諱を憚らず、此處に論ずるなり。

世間でも小兒の死亡するとは非常に多しと云ふ事は已に承知のとなるべし。而して如何なる病氣が尤も多きかと問へば、腸胃の病氣(醫者の所謂消化不良)である、されば此の消化不良より述べん。

一と口に云へば腸胃の病氣、大人なれば何も左程に恐るゝよ及ばず、まさか此れが爲め直ぐに一命と失なう樣なとはない。されば普通な人は又胃病に罹りましたなど〻日常の談柄にして居る。此の仔細の無いらしい腸胃の病氣も、小兒殊ゝ哺乳兒には至ッて六ヶ敷病氣である。全体小兒は軟弱なもの、夫れに又一年未滿ほどふとしたとで

七

病氣になり、夫れが爲に容易に死亡する者は無い。其中で尤も多き病氣は則ち腸胃の病氣で、其の爲に死亡する者は百人中廿五人位の比例、なんと驚き入ッた者に非ずや。斯程迄大切なる病氣なるに、世間ではとんと心配せぬ樣子、心配せぬさへ不心得なるに、中には少しも鈍着せぬ人がある。今小兒が乳を吐くとか、大便の工合が變だと、誰しも先づ醫者に見せる。醫者は診察して、此は腸胃の病氣である、養生は云々せよと丁寧に敎ゆる。偖此時が肝要、心掛なき者は腸胃の病氣だと聞きて、始めの心配は何處へ消え失せてか、夫れから何の雜作もないと早合點し「ハイ、ハイ」と口で答へる斗り、養生の話し聞く耳はもはや無い。少し話しが傍道へ寄るが、何故母親が腸胃の病氣と聽きて捨て置く氣になるかと云ふに、母親は已れ自身と比例べて、自身が腸胃の病氣だとて別に苦勞する程のことなき故、我が兒も同樣、何の仔細もあるまいと思ふ、此れが間違ひの一つなり。前にも云ふ通り、小兒の病氣は大人と違ひ手重であれば、始めより能く〳〵注意すべし。話しの序で故一言するが、余は如何にも悲哀なる塲合に遭ひしことあり。或日の事、吾が小兒科の病院に一人の母親、八ケ月の小兒を抱きて診察してよと乞ひし小兒は、已に六十日以前より病氣に罹り、乳を吐き靑き大便を出だし、手に手を盡したるも効驗なく(果して完全に手に手を盡したるもれか如何にや)加之十日程以前より顏面や足

背に浮腫を起したりと云ふ。何人が聞いても至って手重い容躰と思はん。吾等が見ても又其の如く、治療は隨分難儀なり。偖病氣はと問へば、彼の仔細の無いらしい腸胃の病氣である。吾等は綿密に診察して后、母親に向ひ、とても通ふては十分の療治は居かず、入院して療治する方然るべし、猶歸宅してとくと相談し玉へと、懇に其理由を告げたり。母親は「ハイ」と答へ歸宅したりしが、翌日になり、翌々日になり、五日と立ち十日と過ぎても、入院するの氣色は見えず。吾等は屢々忠告したりしも、何時も「ハイ」と答へる斗り。其中病氣は益々手重くなれり、今は慨きても早や詮なし。故に治療は寸刻も忽にせず、念には念を入れ看護する樣心掛くべし。吾等の云ふ迄もなく、よし治療は十分に行届くとも、病氣によりては不幸に終るとあるば、人生の免かれ得ざる所、人命の測るべからざるは、人々の已に知り玉ふ所ならんが、能く思案して遺憾の無き樣、手に手を盡されんとこそ望ましけれ。

思はずも話しは折れたり、此れよりは又本題に立回らんが、理解の爲し易き樣に、手短かく容躰より述ぶべし。俗に云ふ腸胃の病氣、則ち消化不良とは、哺乳兒にては先乳を吐くとか、青い大便を出すとか、哺乳の工合が變るとか、元氣が惡くなるとか、夜間急に啼き出して止らずとか云ふのが始まりで、夫れより漸次手重くなると、痙攣を發したり、或

九

は手足や顔面に浮腫と起したり、身躰が痩弱へ色が蒼白となり、遂には此れが爲よ一命を失ふものである。左れば右等の樣子ある者は、成丈早く醫者に罹るが專一なり。

此處に一ッ六ヶ敷事は、素人がさも物知り顔に勝手な理窟をつけるのである。例之へば小兒が乳を吐けば、母親は何處が惡いのであろーと心配するに傍から何よ小兒が乳を吐くのは當然です、私も大勢乳を吐く兒を見ましたが、捨てゝ置いても治るとか、或は救命丸がよい、イヤ、奇應丸がよいとか云ふ。加之素人は好んで「必ず」と云ふ語を用ひ吃度です、だまされると思ッて試して見なさいなどゝ云ふ。母親も「必ず」と云ふ語にうかと惑ひ、其氣よなる。此れは無識不學の輩斗りで無く、中等以上の家にても屢々見る所なり。敎ふる人は決して爲あしかれと思ふよは非ざるも、所謂る生兵法なれは大創を招くの基とはなるなり。若し「マシナイ」とか「カイグスリ」で病氣が根から治癒する者なれば、醫者の用は無い筈、なんと間違ひも大ならずや。

偖一度位なら好いとしても、治るかと思へば又惱む、此れが度重りては由々敷大事なり。兎角世間では輕い病氣だと油斷する惡習あるが、輕い病氣でも油斷は大敵、況して消化不良と云ふは小兒には大切なる病氣なるをや。

左れば輕しとて忽にせず、直ちに醫者よ罹る、醫者は藥劑を與へる斗りでは無く看病

の法を敎へる。此の看病の法こそ最も大事なるものにて、吾子大切と思はるゝ人々は、醫者に聽くまでも無く、普通の看病法は心得居らねばならぬ筈なり。故に此れより少しく消化不良に於ける看病の方法を說くべし。

前にも云ふ如く、小兒が無病であると云ふ事で滿足してはならず、強壯の上にも強壯なるべき樣養育せねばならず。吾等が說く迄も無く、強壯の者と虛弱の者とを比較せば、其差ひとり千里のみに止らず、先づ虛弱の小兒は容易く病氣に罹ると云ふ恐れあり、少しでも無理をすれば直に病む、故に養育の方法至て困難なり。左れば第一に經濟の點に就いても損失は甚だ大なり。夫れに此等の小兒を成人させんとする父母の苦心は、中々言辭に盡し難き程なり。偖成人してからが更に難儀なり、強壯の者と比して同一の知識ありとするも、一事業を爲すに當りて、遺憾ながらも同一に働作すると能はざるべし、其事業は矢張り已れの躰力の許す限り迄に止まる。奮起して此れより以上働かば、直ちに病氣を引起すべし。此等の點より考へなば、小兒の養生は一生にとりて何程大切なる者ぞや。從ッて世人が無頓着なる消化不良の養生法を、吾等が極めて必要なりと云ふ道理も、合點し玉ふなるべし。

先哺乳兒にて母乳を以て哺育する者には、乳を與ふる時間を一定すると肝要なり。

十一

小兒によりて同じからねど、二時間毎に與ふるが通例の規則なり。何故如此き方を設けたかと云ふに、乳汁は小兒の胃中で概ね二時間位で消化する故である。左れば少しの取捨は時と場合によりて許し得べきも是非とも此の通り實行せねばならぬ。(但し睡眠中は無論乳を與へずしてよし、二時間目だからとて安眠したる小兒を搖り起こす者もあるまじ。)夫れから哺乳后は可成的沈靜にして置き、搖り動かす等のことを爲す可からず。又濕布を取り換ゆる際にも注意して、無暗に兩足を引き上げてはならず。乳を吐くの時は躰を少しく前方に屈せしめ、頭を支へ居るがよし。小兒を養育したる人々は知り玉はん、小兒の空腹の時に乳房を含ませれば、小兒は喜び勇んで強く吮ひ込み、間斷なく能く哺飲す。一定の時を經ると、漸次に怠り、或は吮ひ或は休むも、猶は乳房を離さず、俗に云ふ「樂飲」是なり。此の「樂飲」と云ふは、小兒已に滿腹になりたる時なれば、無論乳房を離してよい、否離さねばならぬと心得べし。滿腹の上にも乳を飲まする故に、十分に消化することが出來ず、遂には消化不良を引起すものなり。猶は語を換へて云へば小兒が一生懸命に乳房にからむ間は飲ませて害なし。醫者が成丈け乳は飲ませぬ樣にと教へたりとて無暗に與へざれば却て害ある者なり。然し吐乳の烈しき小兒には、二十四時間位乳を哺ませぬとあり。何故なれば乳を與ふれば必ず吐すからである、

此等は塲合が異なるものなれば、無論醫者の指圖通り行ふがよい。

健全の小兒でも以上の養生法に從はねば病氣になる、既に病氣となりたる小兒は如何せばよきか、勢ひ是非とも此の通り守り、此の通り實行せねばなるまじ。若し此の養生を等閑にせば、如何なる良藥も効を奏そると難し。父母は十分手に手を盡したりと思ふも、養生が行屆かねば丸で徒勞と云ふもの、獨り骨折損に止まらばよいとしても、大切なる小兒を失なう様に成りては、百日の說法も何とやら、實に殘念の至りならずや。

藥劑は通例內服藥には水藥と散藥を用ゆる。水藥の用法は別に口傳は非ざるも、散藥に至りては往々間違を起す、散藥は必ず母親の指の先などにつけて、小兒の舌上に載せ置き、乳房を與ふべし、決して湯などに溶解して用ゆ可からず。

道理は此く容易い者なれども、此の通り世間で實行する人は少ない、何故かと云ふに小兒が泣くからである。小兒の泣くは左程迄よ恐ろしき者か「泣く子と地頭」「泣く子よ乳」此等の俗言は果して當を得たものであるか。昔し小兒醫者で有名なる某先生は「小兒の泣くは猶は大人の笑ふが如し」と云はれた實に名言なり。小兒の泣くは大人の笑ふが如しと知らば、無暗に心配して小兒の病氣を重らせても、泣かせまトと思ふは間違ッたとであるぞ思ひ當るべし。此は前に述べたれば事新しく云はねど能く〳〵考へ

見玉へ、必ずや成程と悟り玉はん、悟ッた上は小兒養育上一の重荷をおろした如く、心地冷しくなり玉ふ可し。

乳母に就ては猶は後に說くべし、人工營養とて生牛乳とか、「コンデンスミルク」とか云ふもので養ふ小兒は、人乳を以て養ふ小兒に比すれば、非常ゝ病氣に罹り易く、又死亡し易し。故に父母の苦心は猶一層深きを要す。此事に就ては現に關場先生は育兒衛生法の中に說けり、其他人も吾れも注意し居れば、暫らく默し、猶は後に至りて場合により說くとあるべし。注意すべき點は則ち品質を撰ぶと、調理の方法、清潔法、用法等ゝ在るなり。いで此れよりは年長けたる小兒の看護法に移らん。（つゞく）



○山家花　　畠山　健

やまざとと、今年はひとの、とはぬかな、みやこの花や、さきまさるらん。

○蛙

小雨ふる、ゆふかたまけて、さくらばな、ちりしく池に、かはづなくなり。

○暮春

うぐひすも、老いぬとつぐる、聲きけば、はるはいく日も、殘らざりけり。

古來源氏物語に就きてよめる歌いと多し、されども左の一篇の如くに、極めて難題なるを、極めて巧みに詠みたるは少し。本號には批評欄内に、故安藤爲章の源氏の文章の評を載せたれば、今之を爰にかゝぐることゝせり。讀者かろ〴〵に見たまひそ。

○源氏目錄の長歌　　逍遙院内府實隆

源氏のすぐれて、やさしきは、墓なくきえし、桐つぼよ、よそにて見えし、はゝきゞは、われからねになく、うつせみや、やすらふ道の、夕がほは、わかむらさきの、いろごとぞ、よはふすゑつむ、花のかに、よしきと見えし、紅葉の賀、かぜをいとひし、花のえむ、むすびかけたる、あふひぐさ、さかきの枝に、れくしもは、はなちる里の、はとゝぎす、すまのうらみに、しづみにし、しのびてかよふ、あかしかた、たのみしあとの、みをつくし、しげき蓬生、秋ふかみ、水にせきやの、かげうつし、しらぬゑあはせ、おもしろや、やどにたえせぬ、まつかせも、ものうき

十六

そらの、うすぐもよ、世はわさがはの、はなのつゆ、ゆかり思ひし、をとめ子が、かけつゝしのぶ、玉かつら、らうたき春の、はつねのひ、ひらくる花に、まふとてふ、ふかきはたるの、れもひとそ、それなつかしき、とてなつや、やり水涼しき、かゞり火の、のわきの風に、ふきまよひ、ひかりくもらぬ、みゆきには、花もやつるゝ、藤ばかま、まきのはしらは、わすれしを、折る梅がゝは、まはふやと、とけにしふぢの、うら葉かな、なにとてつみし、わかなぞと、もりのかしはぎ、ならのはよ、よこぶえのねに、れもしろや、やどのすゞむし、こゑもうく、くらき夕ぎり、秋ふかみ、みのりをさとりし、いそのあま、まぼろしの身の、はどもなく、くもかくれにし、夜半の月、きく名もにほふ、ひやうぶきやう、うつろふ紅梅、色ふかし、しのぶふしなる、たけ川や、やろうち川の、はしひめの、のがれはてにし、しゐがもと、ともにむすびし、あげまきに、はかなくもゆる、さわらびも、もとの色なる、やどり木や、やどりとめてし、あづまやの、のちの名もうき、舟のうち、契りわたなる、かげろふを、れのがすさみの、手ならひに、はてぞゆかしき、ゆめのうきはし。

○秋之夜迺漫筆　　錆迺風流士

不時の再會　此の譜は獨乙文學家へーべんがものしたる文章より意譯したるものなり

みかくれぬる玉藻の戀の人しらぬにはなかりけり。昔し男の浮きたる心根は露はどもなく、「あゝいもと、われらは聖督知亞の御寺にて、法師が御法の尊ときに、神の許しを得まゐらせ、夫婦となりて賤なれど、ゆかしの伏屋にこの世を送り侍らん」。と乙女に向ひいひけるに乙女はしばし打俯しけるが、やがて「秋の田の穂の上をてらす稲妻の光のまにも我やわするゝと打すんじ、君より外ま思ひやる人もなし、君なくば彼の世に往くぞまさりぬるを」。とはゝゑみいへば、「さればそれは日に法師許ゆきて、神の御前にちかひなん」。と別れたるその別れいまは昔しとありにけり。

そもそもその男といふは、あらがねの山にこがね堀るをのことなりしが乙女とちぎりし明けの日朝まだきにその家まよぎり、窓の戸たゝきて、「これより我きは深山入りすなり、また逢ひなん」とていにけり。この言葉みじかなる逢ひなんとは何日の日なるぞ、噫これなん今を限りの門出なる。（鐵筆將軍曰、死別固可悲、生別更可悲、至不知生別而畢竟歸於生別、則眞悲哀之極、不復忍言也）

淵は瀬と變る世の中なればこそ、葡萄牙の都府リサボンは地震の爲にうち壞され、七年の戰も時に物語の種となり、佛蘭斯第一も果敢なくかくれたまひ、耶蘇以多義團は解

かれてあとかたもなく波蘭國は三つに裂かれて人の憂となり、いと賢く優にれはせし女帝マリア、テレシアも彼の世に起きたまひ、ストルエンゼー伯(嗹馬國の宰相にして女王マチルダの歡心を得、大に國政を改革し百度盡く擧がる、爲に敵黨の嫉む所となり、訴へられて殺さる)は元を喪ひ亞米利加は自由となり、佛蘭西、西班牙の軍兵はギブラルタルの險要を攻めとり得ず。土耳古人は將軍斯丁を匈牙利のウヰテラニ洞窟に幽し、墺帝約瑟は崩れたまひて、瑞典王グスターフは魯領芬蘭を攻め奪ひ、佛蘭西の革命亂及び長き戰爭は始まり、ナポレオンは普魯西を攻め取り、英吉利の兵はコペンハーゲンを火筒の下にうち荒らしぬ。

蒔きたる種も苅る穗の實りと農夫の喜び、今は粉臼挽くなる老翁の苦となり、鍛冶は鎚うちて絕ゆる間なく、鑛夫は鑛の脈道に堀りて早や幾年を經しならむ。

頃は千八百九年の夏ごろなりけり。フワルンの鑛山にて、ある日谷間の奥にさる穴をほりてけるに、一少年の骸出でぬ。膽礬といへる水にひたりて、腐もせず變りもせず。その面容といひ年生といひ、なほ明らかに知り得べく、恰もひと時前に身沒りしものかとまがふべくもあり。やがて走り行きて里人に知らせしより、里人も集ひ來て、このをのこを見てけるが、誰とて知る人のあるべき。誰ぞその知己なる、名乘り出でよなど呼

ぶ人あれど、暫しは答ふる者ぞなかりける。

たゞかの人と誓ひし縁は千歳ふるとも變らぬな、匹婦の操を奪はんとするも、天上の明月は其の潔きに耻ぢなん。白栲の絲と染めんとすれど、心の白きは涅すべきにあらず、人の世ほど事蹉跎こと多きはなし。身を纏ふ恨み空しく閨に年月の立つ駒早く、今は髮さへ白くなり、額は皺なみ立ちて、齒は僅かに三つ四つ殘り、細き腰はたゆみまがりて弓の如くなり。いま杖にたどりて來て見れば、こは如何に、それなる屍は我夫なり、痛まんよりは喜び溢れ、屍の上に打伏して絶えし如くに見えにける。

聞きたまへかし、これあるをのこは妾が許嫁にて侍り、五十あまりの長の年、あけくれ待ち居り、郭公鳥の鳴く音を聞きては、なき人の宿にかよふ傅手あらば、音にのみなくとつげねかしと恨み、あの世にてまた逢ふこともあるならんと思ひしに、妾の年老へ死ぬる前に、一度こゝに逢はしめたまひしは、ひたすら神の憐みか。思ひ出ださば婚姻といふ日に先だつ八日にかれは果敢なくなりしなり」。又日悲愴不堪多譴と涙にむせび泣き臥せば、集ひたる里人みな袂を濕はし絞らぬはなかりけり。紅葉を風にまかせて見るよりもはかなきものは命なりけり、といふごとく、たのみなきは實に世の中の事なり。思ひめぐらせば、此の老嫗もいにし昔はいみじかりしならむ。今は枯野の尾花よりもたのもし

十九

げなく見ゆ玉の露の艸の上よれかゝぬばかりなり。さるに此の男はたとへそのいき消ゆてはやものいはぬとも昔しに變らぬ面容は春の山の端に月登るごとくなり。

數多の鑛夫はこの骸を板に載せ、そが小舍に擔ひ入れ、いとれでそかなる禮をもて山寺に葬りぬ。

常よつきまとひたるはその老嫗なりけり。終りの土をとふりかけながら墓の傍よて、「一日なり十日なり猶は冷やかなる閨にやすらへたまふべし、妾はこの世に少しく事の殘したるあれば、之をなし畢りてたゞちにれんみが傍にまゐるべきなり、まちたまへぬ」とて念佛しづかに唱へつゝふりかへり〳〵去にけり。 又一日、欲去不能去、一步一回顧、情當然也。

鋉筆將軍曰 譯者語余曰、希遍此文、無有他奇、然首敍少年少女相慕之狀、尾記五十年後不時之再會、中腹列擧數多歷史上之變遷、以示其經過五十年、是所凡筆不企及也。記以代評語。





○打より撫でよ（承前）　　寸草隱士

見れども見ねず、食へども其味を覺らざるは、是れ主人の不在なるが故なるべし。昔日ある大將某ぞが幕下の兵卒等と、地坑に麁朶折りくべて、心地よげに四方八方の語譚に時刻をうつしけるが、火花の飛び來りて大將の脛部に落ければ、不意の事とて大に驚き慌て、思はずも聲をあげて飛退ぎしと、兵卒等の口さがなく、吾大將は驍勇の聞ゑあれば、膽力も強き御方と思ひゐしに、それ虛聞でありけるよ。火花の脛部に落ち來りしとて、差程驚くことやある、人々の手前も憚らで、飛退きしときの顏の色、視るも笑止かりき、他人の噂も訛傳にて、實に賴もしからぬ人かなと、嘲笑せしを大將側かに聞き、程過て再び地坑に集會せし折り、大將火箸をとり火中に投入み火となし、手掌にて兩三度しごきければ、表皮みな糜爛て、目もあてられぬ有樣なれど、大將の神色、平素の如くにて、自若たり。

二十一

之をみし兵卒等大に驚き何故に曩日は怯にして今日は勇なると尋しに大將笑ひて曩日は精神語譚にありて虚心の所火花に不意をうたれ端なくも諸卒等の笑の種となりしが此度は精神火箸にありて其他は知らず。凡そ人は覺語は肝要にて精神こゝにあれば矢石の中に起臥し死生の間に談笑するも懼怖る物とて更になし虚心のをりには英俊君子も不覺をとるものぞ今日の擧動は大人げなけれど精神定まればかくぞと示せしまでなりと答へけりとぞ。英雄君子猶然り况して薄尾花の戰くにも心はくてふ纖女はかくところあるべけれ。れ妙は父母の身の上家政の事彼是思ひ合せて餘念もなき折も折なればヘッと驚きし一念に我身を忘れて茫然と佇立してとは前號に說しが方纔ありて已に反り見れば無殘や米の種親子三人の生命の種われは權兵衛ならねども蒔ぬさきからほじくらる。思へば今の子供等は教育もなき放肆な烏の親の子なるべし何等の小癪な君僕とやに糞たれる年頃でもなきに煙草の畑も卷煙草輪にふきちらそ小童等は犬猫の婚儀にまでも世話をやき和尚よくけれや袈裟までとやら子供の顏は皆いたづら顏。先刻には誠ある人々が妾の心を憫れみて箇様々々して賣も捌かば是れ〳〵の所得もあるべしとて鷄卵を安く買ひさせしのみか取引さきも敎へられしに心も勇み氣も張り弓思ふ的をはづさじと体をもきめていそ〳〵と來れば弦をも引

かぬ間に、外にそれ矢はつれもなし。我身に附ぬ寶ぞと、吾身ひとりて吾身をば、思ひ絶えなば絶えもせん、絶えぬ歎きは父母に、いふて返らぬ事なれど、言ねばならぬとなるが、言へば必ず御心を、痛めるのみか萬一不圖御病着にさわりもせば、如何にせましと吾身に問へば、答ふるものは涙のみ。其儘そこに躊躇まり、破碎し鷄卵をとり捨てつ、撰り出す數も一人子や、二人の親へ孝行の三ッればかくる四の習ひ、とはいふものゝ今一度、五ッかは此世まなり出て、六かし語と操り返へす、時もあるらめ世の中は、實に七轉八起といへば、今の九らうは數ならねども、數十の鷄卵の過半をば、打も碎かれうたかたの、あはれ此世に百年も、長命がたき兩親の、御身の上や此身の上、今日の始末や明日の資本、千々に心を碎けども、萬事世の中儘ならず。まゝよ此儘打開けて、語らふべきは親二人、我身と三人文珠の智惠、慈悲心深き父母に、また何事か包むべき、心億兆とのあるべきや、實に然なりと肚裏、思案の臍を固めても、狂ふ心の若駒に、乘り初めけらし、乙女子が、娘心は兎つ追ひつ、歎きの道に迷ひ入り、果しも長き黑髮の、思ひ亂れて惘然と、涙を拂ひ居たりしに、誰人と知らねど傍近く、步み來たりて、やよ婦人、先刻に二人の子供等は、何等の恨ありけるか、夫とも一時の戯れか、そは兎もあれ角もあれ、擧動の正なきを、見るより性急に血の迷ひ、怒りの火焰に身を燒かれては、なんの遠慮もあらばこそ、わと追ひつめて、擧打ま

くせしが、まて暫時、よしや彼等を思ひのまゝに、打懲すとも砕かれし、鷄卵の數は初の通、よもおん身に返るまじ。反て是れ和女の爲思ふに似て不爲なり、余も敵きを求むる理り、君子は其行を悪むて、其人を悪まずと、聖人の戒め兼てより、吾父母の膝下に、平素に習ひし金言を、思ひ出して我ながら、鈍ましかりきと耻るのみ。是れはこれ吾父母の、干闌盆、正月、年の暮、その他折々惠與れし、恩賜の中より年あまた、殘しれきたる貯蓄よて、塵も積れば山となる、數は知らねど幾何か、攫みしまゝに此所にあり、如斯をりには兎やせんと、かくものせしにあらねども、些少ながらも吾寸志、小供の手より大金を、と、不審しく、思ひ給ふはさることながら、そはまた餘り遠慮すぎたり。今もそれをば言ひけらし、説しが如く怪しうはあらず、春としいへど肌寒く、曇がちなる此空に、かくながくと日をつぶしてはおん身の爲よもよかるまじ、子を待詫ぶる親心、何處もかわりのあるべきや、とくく納めて還ねと、投げ與へたる膝の上、無常の金も鏗然と、聲を放ッて燦爛たり。少年其儘逃るが如く、去らまくすればお妙は驚き、やよ若樣、おん身の御名は、お屋敷はと、問へど少年耳にも入れず、猶行過ぎれば、お妙は益々慌て喃と一聲高らかに、谷の戸出る鶯の、初音よ心ひかれてや、振り向く姿容大人びたれど、まだうら若き三五夜の、月にかざせる紅梅や、彼是似たり鶯宿梅、宿はと問はれ莞爾と、默して笑ふ景情は、よし聲なくも聲あ

るに、勝り劣りのあるべきや、顏も心も香ばしき、香ひを後に置き土產、姿容は霞に隱れけり。

はんの愛敬なるかは知らねども、美笑山人を始めとして、數へ切れぬ程の讀者諸子、小生の拙き小說みまほしとの仰せ、毎日の樣に御申越に相成り、小生に取りはて冥賀至極に候。實の處此の小說欄內に於いて、斯く永々御無沙汰仕るべしとは自らも存ぜざる位なりしが、何分にも病氣のはげしきがため、執筆相叶はず、實に遺憾に堪えず候。何れ平癒次第、御申越にあまへ、拙著御目に懸け申すべく、此段一言いたし置き候。　以上。

帝國大學醫科大學第一醫院にて　鐵筆將軍　大矢森之助

○愛國餘譚　原名ヘルマン及びドロテア

獨逸　瓦弗嚴高悌侯著
鈍廼風流士譯

○第二回　天設艱難出美人
世來騷乱生名士

待に搆へたる金獅館の希爾満は立戻れり。やがて室に入れば、入る時遲く視る時早く、法師は鋭き眼にて、希爾満が足より頭迄、見上ては見下し、須臾其行裝を打守りて、そ

の顔付より、如何なる境遇に逢ひしやを探り得べしといはん許の有樣にて、果は微笑ながら少し離れを催うせる言葉付もて希爾滿に打向ひ、

如何に足下は打て變りし人間となりしぞ。今日迄足下の外貌の活潑なると眼力のかく靈動なるとは未だ嘗て見ざりし處なり。足下が貧者に施與を分配し、神の惠を蒙らせ、また自も蒙りしとは明白なり。

希爾滿は眞實に答へていへる樣、

我れ自ら賞賛を博することを爲したるや、知らねども、我が心はかく〳〵なせよと自ら命令せしなり、そは次に詳かに談ふなるべし。母君の彼處此處にと古片斷衣を探り或は擇び玉へしに、意外に暇どれ、荷作も早く出來ず、又葡萄酒麥酒等を集め束ぬるにも手間取れ、家を出で町に赴きし頃は、早や都民の老幼となく、男女となく立戻れる樣なり。落人の隊伍は、已に遠く行きたり。併し今日は次の村にて宿泊すとの事を聞知られければ、急に馬に鞭ちて新道を驅り行くと暫くにして前を見れば、他國にも最大最強といはるべき倔强の二頭の牛、巨材を以て組立たる車を曳くあり。其傍に急歩せる一處女あり、手に長き鞭を取り、二頭の牛を驅り行き、中々巧者も及ばぬ位なり。かくて之に近き其處女を見しに、處女も我を見て從容として、

馬の傍に來りいへる樣、「郎君の今見らるゝごとく妾の曹は常に此艱難を極めたりし者よ非ず、而して今他鄕の人に向ひ、人の好んで與へざる施物を乞ふは、固より慣れざることにしあれども、早くも此車より打放れ、義務を盡さん物と覺えばこそ、是非なく郎君に請ふ所あるなれ。此黃藁の上に横れる婦人はサル財產家の女房なり。昨日一子を分娩せし處なりしが、此騷乱に遭遇して妾は牛車を求め謀らひ、漸くにして此產婦の命を助けたり。若し一刻も遲かりしならば、產婦の生命はなかりしものを、辛トて免れたりしは、神の冥加か。此赤子も郎君が見るごとく、無事とはいひ、袒裸にて、其腕に抱かるゝなり。今日は次の村驛まで、停留するとなるべけれど、それとて皆な落人の群なれば、中々に此袒裸を救ひ與ふるゝ人はなきならん。然らは古衣の一片にても可ければ、此艱難に逢へる者に賜ふ者所持し玉はずや。郎君は恐らくは隣都より來られし人なるべしと思ふなり。といふも誠やかに訴ふる氣色なり。時に其產婦も草藁の上より顔さし出して我を視たり、其色蒼白ていと憐れを催うせり。巳れ其處女に答へていうやう「善人には善心あるは勿論にて、人の難義も、我身に換へて感ずるなり。幸にも我母君は御身等の難義を思ひ遣り玉ひ、巳よ斯の行李を渡し玉ひしからは、得べき丈御救ひ致すべし。とて直ちに綱の結目

二十七

と繙き、父君が寐卷を出し、又繻絆小衣片を渡したりしかば、其處女も大に喜び謝しつゝ言ひけるは、「凡そ幸福なる人は世の中の限りなき不幸に不幸の重なるをも知らざる者多かり、併し不幸に逢ふて、始めて神明の冥加も、其保護誘導も感ずるぞかし、今郎君が慈善の行ひ、是れ神明に代られしよな。」と頻りに喜ぶめり。女房も嬉し顏に麻布の衣片杯を指にて試み、殊に毛布の寢卷を、觸れ居たりしが、時よ處女は其女房に向ひ、「急ぎて村家迄赴くべし、其上にて赤子の衣裳なりとも、何になりとも辨ずべきなり」とて、數々厚き禮を述へ、牛を驅り行きぬ。我は猶は馬を駐めて考へ居たり。抑も馬を急がせ村家迄行きて、此食物を他の衆に施こすべきか、或は彼處女に讓り渡して、貧乏人に施しもらはんか、孰れか是れ上策なるべき、と躊躇なしたるも愚かなれ。直ちに心を決して處女が車を追ひ驅けたり、少時にして追付たれば、「御身少しく待たるべし、我母君は祖裸を包まむ衣服のみならで、飢を凌がむ食物も酒類も充分に車の箱に備へて贈られたれば、今御身の手よ渡さんと思ふなり。かくて義務も同じく盡すなれ。如何よ御身は必して分配し玉はる可きや。已れは御身次第に致すべし」と言ひければ、處女は答へていふ、「畢生の誠實なる心をもて、郎君が施與を分配すべし。如何に貧人は喜ぶならん。」とて車の函を開き鷄の燒物、食麪包、葡萄酒、麥酒の

諸瓶を取出して處女の手に渡したり。猶は好んで與へ度きも函は已に空しきを以て已を得ざりき。已にして處女は斯食品を女房の膝下に据え、感涙を垂れて立ち去りたれば、已れも車を引かへして立戻れり。

希爾滿は一部始終を物語れば、

隣人は　嗚呼、此騒亂に際したる當日に、獨り其家に棲むは實に幸福なるなり。若しも此世に妻子のありたらんには、如何許かの首枷ならん。今我は幸の者あり、妻もなければ、未た父とも呼ばれず。また妻子を憂ふるの心配もなし。若しや國土を落行かねばならぬしといふ日には、未た鬻がざりし母御の遺産古金銀等を、一纏にまとめたらんには何の難きとぞ。さりとてかゝる時には、益にもならぬ艸の根迄も、堀り出して行き度く、縦令ひ品物の價値大ならぬも、捨つるはいと惜しく思ふなり。我は身に纏へる阿堵物と、身体さへ救へ出せしならば、皆な救ひ出せしなるべし。單身は尤も容易に逃げ得べし。

希爾滿　否々我隣人よ、足下の如くに、我は考へじ、寧しろ足下を駁し參らせんか、抑も此の世の中に幸も不幸も唯々獨り已が身をのみ考へて、他人の憂きも喜も共にせぬ人は、貴とむべき人とやいふべき。人の艱難と見ても其心の動かぬ者は、人情とい

ふべきか。我は今日寧ろ新婦を迎へ、婚姻をなすべく思ふなり。如何にといへば善き少女は保護し呉れる夫を要し、又男子は氣を慰め呉るゝ婦を要すべし。若し又艱難多事の時世に於ては猶更のことなれば、倶に憂き艱難に相扶くるぞ宜しけれ。何とて厄介といふべき。

時に希爾満の父は之を聞き、如何にも仕出來したりといはん顔付にて、

そは面白き事を言ひぬ。その如き道理のある言語は、汝がいふと稀なりしよ。

未た言葉のきれぬ間よ、希爾満の母は直ちに、

オヽ希爾満汝の言は理あり、我々双親こそは善き例しなり、如何といへば我々双親は、昇平無事の日には婚姻せざりき。而して不幸惨怛の時ぞ我等を結縁せしめたる。ある月曜日の朝なりけり……そは猶ほ覺ゆるが其前日には我か都會を灰燼にせし、いふも恐ろしき大火ありて……はやかき數ふれば、二十年の昔となりけり。その日は今日の如く日曜日なりしが、時候炎暑にして旱魃し、泉も井水も水量減じぬ。都民は今日を晴と衣飾て出で立ち、納涼避暑とて多くは山里村邊に赴き綠蔭の下、水車の涯、皆な其樂しむ所となれり。時も愚かよ、町の端に火事始まれり、スヘ火事よと見る間に焔は天に逆巻き、魔風自ら起りて市街を一纏に吹き散らすごとく、麥收後に滿ち

たる穀庫は焼落ち、土藏も家屋も今は悉く一面の猛火となりし、其勢湧く火先は早くも市場に向ひ、妾が父の家も遂に其傍に焼け落ちたり。町の端に持ち出せしは僅許にて、妾は其夜を徹して其場の手道具夜具類を打守れり。其の内に疲も來りて眠氣を生ドまどろむとよと見し間に、夜はほの〴〵とあけわたり、涼しき風は面を打ち、夜置く露は衣を濕し、心地爽かに覺しかど、眼を遮る者は黒烟、烟の中に焼跡の家は、空しく壁をのみ殘せし樣は目を當られず。さる程に食事も終りたれば、氣に懸るは我家ぞ、裳を褰げていてみん、と思ひし折しも旭日は昇りて、雲晴れ渡りぬ。急ぎ我家に行き見れば、哀れなる哉、家居は何處か見まがふ許なり。其頃は妾猶子供心に雛を愛したれば、其鳥屋は如何なりしや、鳥は命を救れしか、杯と心に念じつゝ、家の礎をふみならし、彼方此方と彷徨て、家の後の厩に來て見れは、馬は灰爐の中に葬られたり。無殘にも猶焔火にきらめく太き柱の其上に横はりて、これぞ馬かと見る目もあてられぬ樣なりけり。又隣家と隔てし垣屏は、今は焼崩れて形もなし。時に我夫なる君も焼跡見分とて來られしが、互に顔を見合せて、愁を含み思案顔なり。我夫は妾が手を握りいはるゝ樣、リース孃早く立ち去り玉へ、何如にして此處に來り玉ひしか、灰は猶は熱かり、靴やこげなん、已に我が此丈夫なる長靴も焦る許なり、と

て、妾を抱き上げ、其屋敷を通りて、今に猶は殘れる彼の穹窿門迄行き、玆にて下し妾を接吻せんと迫り玉へば妾は之を拒みたるに、我夫はいたく心切なる言葉にて、アレ見玉ひ家屋は落ち崩れたり玆よ落ち付玉へかし。我か家を再び建築するを助け玉ひね。我も卿か父が家を建つるを助けてん。といはれしも妾は未た解し得ざりしが後にて我夫は母をして父御に相談し、早くも婚姻を齊ひ、此幸福なる縁を結びぬ。猶今日も當時の狀態は目に見る許よて、半は猶燒居る柱、又は其日の炎天など、慘狀と苦みは覺つゝ愁ふれて、又此日の喜びも考ふるなり。オヽ希爾滿をまうけしも此折あれや。故に希爾滿妾は汝が此騷がしき時世に於て、女子を求めて艱苦を倶にし、國家の爲に考ふるぞ好けれ。

希爾滿の父　オヽよくも言はれたり、當時の事はしかなりき。我か經歷も其通りなり、併し人生の經歷更に好くんば、猶は好からん、何も人間は始めより其身体許なりしを固めんとを勉め、人も我も爲せし如く財產を得るとに骨折りて、自ら苦しむるには及ぶまじ。父祖其子孫に財產を讓り其家を榮えしめ、子孫は之を守りて長久に至る者は、幸福の大なる者なり。諺に云ふ萬事創業不容易と夫れ然り、尤も難きは經濟の始なり。人の需要は大にして多し、隨て日よ其價を增す、是に於て利を獲ざるべからず。

乃ち我が希爾滿に望むところは、先づ富豪の家なる娘子を娶らんとを要すなり。夫れ財產と有せる娘子の心を博せんと欲せば、男子の心雄壯なると欲す。今や數年來汝か母が美麗よして勁强なる衣服を購ひ置くは、皆な汝か婦の爲なり、汝か祖父母が手澤の銀金具を貯ふも、父が稀世の珍寶を集め置くも汝か爲なり。如何に又汝か婦の財產を有せるを見ば、汝の心も喜ばしからむ、見よ彼の婦が厨にも房室よも手慣し已れの器具を用ゐ、自ら我が寢床を掃ひ我か食卓よ向を、婦も亦心に心よからん、我はこの如き婦を見んと欲するなり。好し綠葱の服の女を娶りたれは、夫も之を賤みて下婢視せん、下婢の如く使役せん、蓋しもと下婢のごとく、一の行李を擔ひて住み込みし者に異ならざれはなり。是にては男子の心は正しからねど、其相愛するの心は忽ちに失せなんとす。アヽ、我希爾滿若し我老を喜ばしめんとほりせば、隣翁の彼れ緣りに見ゆる隣家の娘ぞ好偶なれ。

彼の翁は實に素封の人にして、其商業も其工作も日に富を滋す許なり、何處に又利けぬ商賈あるや。彼の翁には三人の娘あり、財產は三人して分領するなるべし、長女は我れ知るが已に許嫁あり、然し次女も三女も猶ほ乙女なれども、王上の點を得るは遠くはあらじ。若し我をして汝らしめば、二人の中一人は必ず携へ來ることを畏れざるべ

し、汝か母を連れ來し時もしかなりけり。

希爾滿　兒か心は父君の如く、隣翁の娘誰れか擇てんかなと思ひたりき。我々はともに育ち上りし者にて、幼稚なき時は市場の井戸の傍に戯ふるを常とし、彼の子の爲めには乱暴なる童兒を禦ぎて、其難を助けたりしは幾度か、今ははや一昔となりにけり。子供も今は娘子となり、好んで家に止まりて童兒の群には中間入せず、其敎育はよッて善良なるは慥なり。兒も時々は昔し馴染の交りと思ひ、隣へは赴きたり。然れとも如何ましても其娘等との交際は兒には面白からぬなり、何故と問はるゝならば、彼の娘等はよくも兒をば嘲弄す、兒は之を耐へ忍ぶと雖とも、心の内はなどか面白からむ。例之へば希爾滿殿の外衣は長が過るとか、衣服の品は粗末なりとか、其色は餘り野鄙なりとか、頭の毛はよく巻いてはあらぬとか、笑ひ罵る其時は、兒の心は如何ならん、その時よりして兒は飾らん者をといふ心を起し、彼の日曜日には必す出行き商家の丁稚の如く半絹の上衣を翩かし、意氣少しく揚々たるに、思ひきや、彼の娘等は猶はも兒を愚弄せるを。兒の心は感動し易し、我が高慢の心も今は打ち挫けぬ、然りながら猶は深く兒か心を痛ましめしとのありたるは、かれ兒か心を誤り解してのとなりしが、殊に尤も若き阿ミン孃の如きは兒か親切を取り違へし事ありき。それ我が神の祭の日

なりし、今上なる戸棚にかけたる新しき上衣を穿ち、他の少年の如く髪を束ねて後に垂らし、隣翁の許へ音なひたり。其娘子等の室に入るや、彼等は皆なク〱と兒を笑ふめり、兒は心に懸けず會釋せり、時に阿ミン娘は風琴とかなでながら歌ひたり、翁は傍に坐して喜悦の色をなし、兒は少時其唱歌を聽き居たりしかど、其中に解せぬ事柄ぞ多かり。「パミナ」とか又「タミノ」とか數々耳に入りたれど、何如なる人物ならんかと遂に默々に附し置き難くて、唱歌の一曲終るや否や、そは何の曲にて、二人の人物は如何なる人か、と問ひ聞しに、皆默しながら顏見合せて笑ひたり。隣翁いへらく我友よ、君の知る所ろは獨り亞當と夏蛙のみなるべきか、と聞いて娘子等は聲はり揚けて打ち笑ひ、翁は腹かゝへてぞ興じ合ひたり。兒は心まよひ已が帽子も打落して赤面せしに、娘子等が嘲笑はうちも絕ゑせず、其唱歌よりも長かりけり。兒は急ぎて家に立戻り、外衣を戸棚に掛け、結びし髪も手にて解き放し、心に誓て曰らく、兒は再び鄰家の閾を蹈まずと。嗚乎兒何ぞ非ならん、彼唯薄情にして意氣誇れるのみ。嗚乎彼等は聞くが如くんば、兒を當日より「タミノ」と字せり。

希爾滿の母は、汝希爾滿は小兒の作法に付て怒るごとき事あるまじ、小兒の所爲は皆な話にはならぬ者なり、阿ミン孃は然し善き娘子にて、汝に氣に入りたる樣子なり。近日

も妾に希爾滿どのは如何におはすと尋ねしこともありたり。汝彼の孃を擇ぶべし。

希爾滿は思案の顔付にて、

兒は何とも申されず。當日の耻辱は深く心に染みて銷えず、最早彼孃の風琴に倚り唱歌を作すを聽かざるべし。

と言はせもあへず、父は大に怒り激せる聲にて、

如何しても汝は面白からぬ嗚呼者なり、我常に汝に言ふに非ずや、汝は好んで馬に鞭ち田圃に打出づる性質なれば、其樣なることは我等の奴僕の爲すことなれ。それと汝のなすとは何如にぞや、それか爲め此爺か客抔に應接するとき、悴をも引合せん者と思へど、汝は田圃にありて家に居らず、又汝は幼稚の時よりして、讀書より習字、算術に到る迄、學校の仲間には後を取り、常に末の席に坐せしことを考ふれば、汝の胸中には少年の有する名譽心てふ者は空しき者の如く又自ら高うする精神もなき者の如し。若し此爺が汝に敎育せし丈け、親父が我に敎育を仕向け、學校にも出て敎師も取りしならば、ヘア我は今金獅館などの主人にてはあらじ。

此時希爾滿はツト立上り、默然として戸際迄歩み、徐ろに音をも出さず、立出てんとせし處に、父は面色荒らしげ少しく追ひかけ、何處へなりとも行きねかし。汝こそ眞の剛愎

者なるべし、是より直ちに農作にても爲すべしそは我は識はせじ、されさりながら百姓娘はよも我家には連來らざるならん、我も多年經驗を積み、人との交際は勿論、貴紳貴女をも心よく慇懃に欵待せり。他國他鄕の人には殊更丁寧に接せり、新婦は之を心得て少しは我が勞力を省くべし、農夫の娘なぞはなにとて之を心得ん。又新婦は我を慰むる爲め、風琴位は彈じ得て、我都會の人々我家よ集まりたるときは、之をも樂ましめ得べし。見よ、如何に隣翁は日曜日は之よて賑々しき。

希爾滿は徐に戸を押し開け室を立ち去りたり。



批判の學たるや難いかな。文法を評し、語句を批するは東洋の批評なり。内容は外形と一致するや否や、時と處各權衡を得在るや否や、律呂齊く擧がり、音調是れ整ふや否や、を撿するは西人の批判なり。摩高禮猶

一歩を列孫に讓り、彼は歐土第一の批判家、審美學の泰斗なりといへり。思ふに列孫、瓶角滿等は何如なる處より着眼し來りしや。而して東洋批評の學に於て果して其の人なきや。水府の儒臣安藤年山、紫女七論を著し紫女が文章、休裁、著述、品行等を細評せり。或は是れ美術文學中の一小批評に過ぎざるならん。玆に其の一班を見はす

○源氏物語の文章

故安藤爲章

物語のうち、和歌ならびに詞ともに萬葉、古今、伊勢物語、うつぼ、竹とりなどの古躰をはなれて、しかもふはとかに、やすらかに、やさしく、れほよろ吾國の風流をつくしたれば、見る人をして倦む事をしらざらしむ。まことにやまとぶみの上なきものなり。全篇は富貴温潤の氣象にして、官樣の文章なれども、中に山林出世あり、市井田家あり、貧困哀傷あり、閨情風景は卷ごとに見ねて情をうつし京をかたどる事、まのあたり其の人にむかひ、其の所にあそぶがごとし。全躰は傳にして、又れのづから序躰あり、跋あり、記あり、論あり、書ありて諸躰そなはれり。かのはゝ木の卷の品定は殊に奇妙なるものなり。爲章嘗て其の章段をあらためて侍りける時に序して云ふ、論破あり、論承あり、論服あり、論尾あり、粗より細に入り、俗より雅にれもむき、繁より簡に歸し、波瀾頓抽、照應伏案などいふ、

もろこしの文法れのづからそなはり、その氣脉は悠揚として寛裕に、その文勢は圓活にして婉曲なり。（是の品定のみならず一部わたりて此の意を付べし）に是れを漢文にて見侍らば、史記、莊子、韓、柳、歐蘇にひとしかるべし。女の筆よてはめづらかにあやしく、式部はまことに古今獨歩の才といふべし。古より清紫といひならはしたれど、清少納言は才氣狹少にして、さかしたちなる跡あらはに、にくさげれはきものなり、同日よも論ずべからず。（以上品定）或人の序の略（いはく、）式部が文章を以て何にも實錄をかゝずして、無用の作り物語を殘し、よくせずば誨淫の媒となる事、いとも念なき事ならずや。答へて云はく、これすなはち爲時の（式部父）が男子にてもたらぬ嘆なり。男子ならましかば、一部の國史を撰びて、萬代の龜鑑にそなへ侍りてまし。女なれども英才つひにれはふことを得ずして、につかはしき物語つくりて、閨門の風儀用意を敎へたるが、すなはち式部なり。物語と日記とをよみて、其の氣象をはかるに、式部はいはゆる甚しき事をせざる人なり。さかしたちたる事をきらひたる人なり。もし實錄めきたる事を書きたらば、女ににつかはしからず、甚しきことなり、賢したちたることなり、しからば式部が平生れ用意とは相違すべし。但しひて實錄をもとめば、彼れ日記はすなはち實錄なるゆゑよ、榮花物語、初花の卷は全くこれをとりもちひたり。その日記むかしはさだめて數十年卷々ありぬべけれど、世に傳はらざ

るは不幸といふべし。今傳ふる日記は僅にその一篇さみゆ

又曰、此の物語をよみて其の旨とうる人は、其の身の風儀用意をかへり見て、をのこも女も、おのかしゝ一箇の好人となるべし。もし誨淫といはゞ、國風に婬奔の詩を載せられたるも、さなんそしるべしや。美刺勸戒は詩歌の徳なるべし。先達のをしへ丁寧なりといへども、われ〳〵愚なる意にては、勸戒うつりがたうして、いかにぞやことたらはぬやうにおぼし侍るに、幸に此のもの語なん遠く儒佛によらずして、近く和國の人情風儀を以て、美刺を言外にしらせたれば、感味ふかくしておのづからすき〳〵しきふるまひをにくみ、まめ〳〵しき心のすぢ厚くなりゆくやうにおぼえ侍る。式部としらざる人は誨淫のそしりあるべし、式部をしる人は勸戒のあきらかなるをおもふべし。されば此の物語を歌道の經典に備へはべらまし。さは侍らぬか、といへば或人うなづきて、吾國いちはやひ崇はしき人のうまれなれば、直諫は入りがたうして、その物やはらかなる諷諭なん病に應ずる藥にて、げにも歌道の本意にはべりてんといふ。

○少年文庫（毎月一回東京府北豐島郡上駒込村少年園發行）

今吾人の机上に横はる少年文庫第一號より第三號までを見るに、成童攻文の資に供

せんとするもの丶如し。欄を分つ凡そ八、曰く少年文庫、曰く學說、曰く文藝、曰く叢談、曰く For Young Readers.、曰く雜纂、曰く餘興、曰く小記者、等即ち是れなり。而して獨り小記者の一欄は、天下少年諸子の寄送に係る、愛らしき文詩を載するに供す。總べて記事といひ、体裁といひ、頗る將來に望みあり、但遠慮なくいへば、文藝欄ハ一層の擇撰を要すべきなり、其の載する所の歌などの如き、往々小記者中にあるものよりは劣れるあるにあらずや。

善き序なれば、吾人は同じく少年園より發行せる少年文範に就きて一言すべし。吾人は夙に同書に就き、非常に奇佳に感じたり、何となれば世評如何にも區々として、全然相反對する如き觀ありたればなり。乃ち一方の評者は善く撰びたりといひ、一方の評者は無茶苦茶の選び方なりといひ、一方の評者は甚だ少年に適好なりといひ、一方の評者は極めて少年に不向なりといひ、一方の評者は鋭意之を世の少年に推薦せんとし、一方の評者は熱心に之を世の少年に媒介せざらんとす（前者は讀賣新聞などのごとし。後者は國民之友などのごとし。）嗚呼、其の相距る豈啻に千里のみならんや。如何に今日の批評世界よ情實の行はる丶にもせよ、各評者の言の斯く雲泥月鼈の相違あるは何に依ッて然るか。蓋し其の發行者が少年なる文字に對し定義を下さゞればなり。夫れ少年なる文字の意味する處極

めて廣く、極めて大なり。今時少年書類なる者大に流行を極め、吾人の知れるものゝみにても隨分多々なり。而して此の多々の少年書類の、各々目的とする所の少年は、果して皆同一なりや。精言すれば、彼れの所謂少年と、此れの所謂少年とは、果して同一なる少年なりや。吾人は斷じて其の然らざるを知るなり。小學校に於いて「ハト」「ハナ」「トリ」を高誦する少年を目的とするものもあらん、高等中學に於いてミルトンの詩、マッコーレーの文を味ふ少年を目的とするものもあらん、或は日本外史の字引、リーダーの獨案内を師とする少年を目的とするものもあらん、或は康熙字典、ウヰブスターの大辭書と首引きする少年を目的とする者もあらん。斯く少年も種々ありて、少年書類を編輯する人々の、其の目的とする少年も種々なり。故に彼の少年文範の如きも、豫め本書の所謂少年とは斯くの如きものなり、と其の少年なる文字に定義を與へざりしを以て、果ては少年に適好なり、少年に不向なりといふが如き正反對の鬼怪なる評論こそ出でしなれ。然れども其の實、或る少年には全く適好なる者にして、或る少年には極めて不向なるものなり。吾人は望む向後尙少年書類の發行、少年雜誌の編輯に從事せらるゝものは、我が所謂少年とは斯かる少年なり、と豫め其の目的とする少年なる文字に定義を與へられんことを。少年の定義を下し、少年の範圍を限劃せば、販路の縮少せんことを恐れて

何時までも其の文字を曖昧にする如きは吾人の大に取らざる所なり。

○「よもや草紙」一口評

大竹忠太郎

池の端の殿様がいつぞやものされし「もしや草紙」の、如何なる風の吹き廻しにや、意外の好評ありしにあやからんとてか、其以前讀賣新聞に執筆せられ、夫れよりひらがな新聞に居られし加藤紫芳先生は、久しくドロン〳〵の雲隱れに消え失せられ、御姿を拜見せざりしが、此頃の小說流行に狩り立てられ、「よもや草紙」となん呼び侍るあやしきふみを著作されたり。之れよき得物御恐なれと、禿筆執ッて身構ひし持前の惡口叩くこと、エヘン左の如し。

表紙は近頃の𪉩氣流行に珍らしき花やかさ。てもなく緣日に草花を見る心地せり。そも先生は得意の艶筆を以て、我文壇を震動せしめし方樣なれば、如何に面白きことならん、と心嬉しく拜見せしに、目算はガラリと外れ、其失望と落膽にアッと叫絕せり。二十五字詰十二行百五十頁、皆平々凡々の文句、御趣向は新道の野良犬も喰ぬ女郎の手管。藝妓の內幕、其上聞き厭きた——別に新らしき想像もなき——國會未來記………よもや〳〵と思ひしに、其マヅきこと甚し。之れ蓋し「よもや草紙」と名けたる所以なるべし。

篇中宇和佐伯爵と開成覺彌の談話に、「……娼妓といふものは社會上欠くべからざるものなれども、藝妓といふものは專ら娛樂の爲に外ならず、此上もなき贅物なれば……」など、斯の如き娼妓は必要にて、藝妓は不必要など、加藤博士の御說にも聞いたことなき馬鹿氣た議論を、我貴重なる帝國議會に吐く白痴者ありとも思はれず。又言葉に變なところあり、八十四頁に「……おめヱが二三度でたとか聞たあの口尾ヨ……」とは隨分變にーて、藝妓の言葉とは思はれずべらんめへ社會の言葉なり。斯樣な所は蛎石の穴の如く枚擧に遑あらず。評する程の價値なければ之れにて筆を洗ふ。要するに此書は主人公もなく、瑕疵澤山にて、メチヤ〳〵のものなり。モシ先生、以來は小說製造を止め、小說を著述あるべし、盲評無罪。



○女子風俗に就き

鈍廼風流士

幽鬼魍魎を扮し、或は慓悍なる武人を裝はむ爲め、其面貌若しくは身躰を彩色するとは、事戲臺の俳優に屬すと雖も、猶下級の位置を占むるの種族に在りては、身と彩色する一に日々通常の事に異ならず。彼の鉛華を襯し、紅粉(臙脂)を施す等我邦人は之を異まずと雖も、然れとも之を人類學に徴すれば是決して其美風ならざるを知るなり。

乃ち彼の印度安土番は時として全身を色どるとあり、或はまた顔面のみ彩色するともあり。若し一家族の長老なるもの死するときは婦女子は其顔面を黒く塗らねばならず。(これ蓋し印度安土番の一種族に限れる者なりといふ)。アンダマン諸島(英領にして孟加灣中にあり)の婦女子は面部に於て幾多の線狀なる彩色をなし、以て其美麗なる扮裝となすなり。

例を遠きに求むるに及ばず、「アイノ」婦人大島婦人(大隅に屬す)等は文身するを常とせり。而して此文身なる風俗の起原を尋ぬるに、是れ年老ふるを防ぐ者の如し、乃ち面部などにて皺の寄る處に、此入墨をなすなり。「アイノ」婦人は口の周圍に髭鬚の生へし如く青色に文身す。之を七歲の時に始め漸々增加し行くなり。而して琉球諸島中の大嶋に於ては唯婦人のみに限りて文身し、殊に兩手背になすを以て規則となせり。其繪は渦紋をなし、或は魚形等にて一定の意ある者の如く見ゆ。此風俗は嘗て沖繩より傳はりし者といふ。女兒は概ね十三歲の時より、文身を業とせる專門家をして施行せしむるなり、其色は概ね青藍色を用ふ。明治七八年の交、我政府は之を嚴禁してより、此野蠻なる女子風俗は、今や人類學史傳の部となれり。

大洋群島、南亞米利加諸邦、エスキモー等の婦人は依然文身するを以て畢生の裝飾となす者の如し。

交趾支那の婦人は檳榔子を嚙みて其齒を黑うす、而して我邦の婦人は鐵劑と鞣酸を含める附子粉とに由り、(即ちインキなり)同じく其齒を涅す。思ふに現今の文化に於て猶は之を施す者少なからず、抑も亦何の謂ぞや。

眉を畫き之を染むるは、東洋婦女一般の風なるに似たり。土耳古、波斯、高加索、支那、安

南等然りとなす。而して我邦の婦人は之を剃去するを以て風となす。また是れ何等の謂ぞや。

南亞米利加の婦人は(ボトクーデン)口唇に木片を貫き、亞非利加の蠻婦は耳を穿つに木片椰子葉或は花蕚等を以てし、歐羅巴の貴女は金環を以てす。嗚呼、我邦の婦人は之を學ばざらんことを希望するなり。

昔し希臘七賢人の一人に他勒といへる人ありけり其言にいふ己を知るは最も難く他を議るは最も易しと蓋し警語中の警語なるものか

○婚姻の年齡

一國の文化野蠻貧富强弱と國土の氣候如何とに據りて、結婚の年齡は異同なきを得ずと雖も、然れども之を確定制限するは甚だ難しとする所なり。

政治家は立法家と大に意見を異にし、一方は身體の成熟を以て其期となさんと欲すれば、一方は精神上の成熟を原據となし、終始一致せず、刀圭家と雖も互に論點を異にして歸着する所を知らざるなり。

嘗て聞く希臘の立法家リクルグスは男子三十七歲以下にして結婚するを禁じたりと。而して鴻儒プラトーは男子三十歲、女子二十歲を以て適齡となせり。羅馬邦に在りては女子は十三歲より十六七歲の間に於て嫁せしめたり。奧古斯多帝は女子二十

歳にして子なき者を罰せり凡べて羅馬の立法家は女子十二歳を以て成年とし已に結婚せしめたり、是れまた羅馬の女子は常に年妙齢にして多子なる所以とす。

中古に及むで、結婚上有力の者となりしは宗敎なり、其媒介所は敎堂なり、其堅修は僧侶なり、而して彼の敎法々律は制定しいふ、女子十二歳、男子十四歳を以て成年となす、と。近世に到り男子十八歳、女子十四歳と定め、嘗て普魯西王國に於ても醫家は年長を主張し、法律家は早婚を案出し、議會に附せしとき、法律家の勝利とありて、此年齢と適當となせり。千八百七十五年二月獨乙國會は男子二十歳、女子十六歳を以て結婚年齢最早限と制定せり。

拿破崙第一世は舊制を改め男子十八歳、女子十五歳を適齢となし、英國に於ては男子十四歳、女子十二歳を以て最早限となし、制限稍〻寛大なりとす。

然れども之を實際に徵するに、一家經濟の點は實に婚姻をして晩からしむるなり、民法の有無に關せず、習慣法の成文不成文を論せず。文明社會は結婚をして一に緩徐ならしめ、生計といひ獨立といひ世襲法といひ、學といひ、業務といひ、交際といひ、皆な結婚を遲からしむるの要素なり。故に白髮の處女あり、一生獨身の老翁あり、萬里の波濤を侵して米國に赴き、聊か偕老の資を博し得て、而して空しく黄泉の客となる者あり、終に

身を黒風の花月温柔郷に没落せしむるなり。噫。

好しワッペウス(統計大家)が調査したる數字を信用して、之を一觀察せんに、女子の結婚平均年齢は、

サルヂニア、	廿四歳。	諾威、	廿八歳。
英吉利、	廿五歳。	和蘭、	廿八歳。
佛蘭西、	廿六歳。	比耳義、	廿九歳。

なりとす。而して一萬人中に於て女子結婚年齢は、

英國	二十歳乃至二十五歳	五三八八、八。
佛國	仝	四〇〇九、八。
諾威	仝	三七九九、八。
和蘭	二十五歳乃至三十歳	三五五〇、八。
比耳義	仝	三一四四、八。
墺地利	三十歳乃至四十歳	三〇六五、八。

其制定年限の早きにも關せず、實際は此の如く老婚なり。

我邦にては昨年九月に於て大學教授六名は大學總長の命に因り、本邦男女婚姻年齢

を取調べたりしが、其復命に據れば、結婚の最早限を男子十七歳、女子十五歳(倶に滿年なり)と定め、男子二十五歳以上、女子二十歳以上を以て生産する子女の健康保全を期望するには最適齢となせり。

○餘　興

左の一編は比叡山の沙門大僧都詔澄、字は幽明となん申ける大智識の衆生が、佛教を深遠にして讀み難く、悟り難しとのみ思ひて、金襴の袈裟光りまばゆく、和尚の殊勝げに念珠をつまぐるを見て、はや隨喜渇仰の感涙をながし、御佛の本旨を悟り、五塵の火宅に住めども、心は眞如の月をながめ、身は穢土にあれども、思ひを極樂淨土に通はすを知らざることを歎き、高尚の意を以て誰人にも解し易き戯文を草し、圖に題し與へたるなりといふ○　摩訶三壽は大僧都の戯號なり○

○骸骨の三弦を彈ずる圖に題せる歌　　摩訶三壽

昔々の昔より馴に馴たる煩惱の、その御心の歇ぬゆゑ、三の界を離れ得ず、又欲界の末の世に、生れさんした主ドやもの、穢れ不淨も知らばこそ、貴からぬ身をあてと見て、迷はしやんすは道理と、わしや思はぬでなけれども、今にも消ん陽炎の、無墓身にて春の夜の、仮寢に結夢よりも短かき契りせんよりハ、主もわらはも諸共に、今の浮氣をたしなむて霎時のほどを辛抱し、唯朝夕に、後の世の經營ごとに精出して、在所に御座る彌陀さんに、れ願ひ申し故郷へ歸ッた上て添ふならば、男女の差別なく、三十の上に二ッてふ、好な相に六通も、自由自在な身となりて、觀音さまや地藏さん、心のしれたれ方等の、れ世話にな

りて日々を、樂に暮したその上に、お前百まで私また、九十九までといふやうな、短かい鈍な事じやなひ、幾万年の後までも、變らぬ中となるのみか、平生にする業とては、玉の林の花見やら、寶の池の船遊、ざぶさのいらぬ飯たべて、自然に出來る衣を着て、琴の調や笛の音に、舞と舞やら歌ふやら、又は砌よ咲揃ふ、玉の蓮の華摘て、神通とやらいう籠よ氣儘よ乘て遠近の、四方の御國の佛様よ、お上げ申しに参れり、又は無生の定に入り、思ふ事さへ退ぬ身と成にし事を樂みに、今日か明日かの程とては、本に定る事もなき、風さへ待ぬ白露の、散間の事は兎も角も、緣に任せて、一筋に、故郷に御座る爺様の、御名を唱て詫さんせ、仮令ひお前にどの樣な、深ひ罪過あるとても、可愛と思ふてござんする、お慈悲の深い御心ゆゑ、許して迎においい出るに、實間違ひはないかいな、浮れ出たる極樂の、故郷へいんで爺さんの跡目相續さんしたら、私も無明の名を改て、即明となるからは、本より合ふた胸と胸、心は一ッ二ッない、三ッの身ならず四ッの德、十の力もあるなれば、上は有項の雲の上下は無間の底此に、憂い苦しい無狀い、五衰の惱み四苦八苦、瞋恚の炎ときの聲、愚痴貪啖の諍や、飢渇の嘆き血の涙、氷の海や大紅蓮、釖の山か火の車、巡り〳〵て世を渡る、その人達を救ひおげ、今の苦勞の數々を、昔し談にしやうなら、嬉しい事でおらふぞや君、

又も聞く、人の哀れを、いつか我、おはれとよそに、人のきくらん。



○女子敎育奬勵會東京女學館

這度雷名夙に天下に轟き渡れる學者紳士數名の發起にて、女子敎育奬勵會なるものを起したり。吾人其の所謂設立趣意書なるものを見るに、奇と思はるゝと甚だ多し。最も奇に感ぜしは、其の副會頭の非常に多きことなり――二十一名――豈に驚くべき多數の副會頭にあらずや。又此の奬勵會にて設立せる一女學校あり、東京女學館と名づく。東京女學館は女子奬勵會、即ち在朝在野の有志者が、莫大の資金を投じて創立したるものにして、賢妻賢婦賢母の養成所としては、日本國中惟一無二の良黌なりと自白したり。隨分大膽なる自白にはあらざるか、吾人は御自惚の程、喫驚の外なきなり。而して學校開設早々、未だ一人の卒業者を見ざるべきに、好結果を得たる由記しあるは、吾人特に其の意を知るに苦しむ。

○國のもとゐ

女子敎育奬勵會にも劣らざる程の、貴顯紳士輩の贊成を得て、發行し來りたる國の基は、去月より廢刊したり。吾人其の何の故なるやを知らず。或人曰く、主筆矢田部良吉、能勢榮両氏が女學界を離れたるに依るなる可しと。吾人は其の果して然るやを保證する能はざるなり。

○吾人は信ずる能はず

道路説を爲す者あり、曰く、內國博覽會開けて、地方人士雲の如くに、霞の如くに輦轂の下に蔟れるに乘じ、一府八縣の美人品評會なるものを開かんとするの狡兒ありと、シカモ慈善の二字を蒙らせて。貴重の人間を物品の如くに衆庶の縱覽に供するが如きは、西洋各國には往々之れ有り。然れども我が大日本國にては、古來斯かる馬鹿氣たることなし。這度の巷説固より信ずべきにあらず、否吾人は信ずる能はず。假令共れをして萬が一にも虛報ならずとするも、我が內務大臣は決して許さゞるなり、斯かる言語同斷の開會を許さゞるなり。吾人は堅く之を保證す。

○高等女子師範學校及び附屬高等女學校

或人曰く高等女子師範學校には、是れまで耶蘇敎主義の女學校より轉じて入學したる生徒あれば、他の潔白無垢の女生徒も往々之に感染するが如く、

聖書(バイブル)を有難さうに讀む者多かりしと聞く。　然るに這度また該校に附屬せる高等女學校には、耶蘇敎徒中の大家中村正直氏之が校長となられたるを以て、或は此の後其の一言一行は、生徒をして皆聖書を讀ましむるが如き結果を生じはすまじきか、高等女子師範學校及び附屬高等女學校は全く耶蘇信徒の巣窟とはならざるべきかと。　吾人は其の說の杞憂たるに過ぎざるや否やを保する能はざるなり。

○産婆志願者

東京府下の産婆開業志願者は、年々に增加し、目下執行の第一期試驗の志願者は、合計五百三十餘名あり。併し試驗の科目も前回より程度を高められたるにより、免狀下附を得る者は十分の一强位なるべけれども、此の志願者が年々三回の試驗に合格したらんには、五十年後の……自分で自分の……とは東京日々新聞の記する處なり。　然れども是れ需要と供給との關係に頓着せざる議論よして、所謂杞憂に過ぎざるものといふ可し。　吾人は一回の試驗に千人の志願者あるも決して不可なりと謂はざるなり。

○近江婦人善會

立派なる慈善を名として、毫も慈善の實なきもの、滔々たる天下殆んと皆然らざるはなし。　然るに今近江婦人慈善會より寄送せられたる同會第二次報告を見るに、是れぞ誠に名實相合ふものなるを覺ゆ。吾人は爰に其の緒言を掲げて、一班を讀者諸子に知らしめんとす

近江婦人慈善會第二報告

玆に本會第二報告を編纂し、各會員よ頒布するに際し、本期間經歷したる會務の顚末を摘載し、讀者をして其の要領を知るの便に供す。　其の詳細の如きは各條項に詳悉すへし。

抑本會か第一次報告を頒ちたる後ち、內ち會員は一層會務擴張の事を課り、外か員外よりは入會を望む者續々踵を接し、爲に月々隆盛の域に進みたり。蓋し京阪を始しめ、全國到る處として慈善會の設あらさるなきに至れとも、本會の如く義心に富みたるは敢て聞知せさる處なれは、猶益々進んて終には全國に近江慈善の旗を翻し、遠く海外よ至る迄義捐を波及せしめん事を期するに至れり。　豈賀せさるへけんや。

本會は其の規摸を擴張したるにより、毎月定期會に於て德育、智育、衞生等の演說をなし、德育演說は京都所本願寺講師を招聘し、智育は本縣尋常師範學校の敎員を招聘するを例規とし、既に十月廿日衞生局長長與專齋君よ請ふて衞生上の演說を聽き、又十二月廿二日本派本願寺法主大谷光尊師の臨會を請ひ、德育演說せらるゝ等ありて、爲に本會一層の光輝を添へ、益々將來盛會をトするの兆を得たり。　玆歲

四月蒲生支會を開設し、之れを南北両部ょ分ち、日野及ひ八幡にて盛なる開會式を擧けたり。

同月二十七八の両日例ょより會市を開設したり。昨年に比し出品点數も多く、會員手製に係る物品等は著るしく進歩し、各精工を極めたりしか、何れも二日間ょて一點を餘さす賣尽したり。

同七月各地非常の水害古今其例を見さるの大變災にして、就中和歌山、奈良、愛知諸縣の如きは實に惨怛飢餓に叫ふ者幾万人を知らす、豈同胞の情として傍観するに忍ひんや。 爰を以て本會は特に會員に訴へ、臨時義捐金を募集し、以て三縣下に分ち、救助したり。 徴集金本支合計は百八拾餘圓なり。

十二月廿五日大津縣立病院の施療窮民へ、食費補助として年々金百圓宛救助せんことを本縣へ上申し、以て其の認可を得たり。

以上述ぶる處は其の要畧にして、詳細の事は條を分ち下文に列記すべし。

○米價騰貴の影響

去月十七日午後十一時頃、新潟縣西頸城郡能生町の貧民、男女打混じて五百餘名程も俄然一時ょ蜂起し、大に暴行を働きたり。 斯く多數の貧民が暴擧に及びたる原因は如何といふに、奸猾なる米商連が相塲を乱騰せしめ、巨利を貪らんとて多くの米を買込み、現に地方在米の僅少をも顧みず、無暗矢鱈に輸出し、或は小賣を差止むる等、貧民の口を乾す事を計りしょより、米を食ふ能はずして死するも、殺されて死するも齊しければなど、竟に此の暴擧ょ及びたるなりと聞く。

○民友記者に質す

民友記者は其の國民之友第八十號ょ於いて、在外醜業者と題し、次の如く記述したり。 我醜業を營む婦女が、頻年米國に赴くものありとて、學者政論家囂々として之を論難す。 吾人もまた之が出稼ぎを防ぐの道あらば防ぎたしと思ふ。 然れども世の論者よ、一考せよ、大日本帝國の京城、文物典章粲然の名ある東京の四邊は、白堊赤壁粲然たる醜業者の家を以て取り卷るゝょあらずや。 法律の眼中已に斯かる醜業者を容るは、他の醜業者が海外ょ發程する、是非もなき次第にあらずや。 須らく先づ汝の眼光を内地に向けよ。 と。 嗚呼民友記者は一を知って二を知らざるものゝみ、須らく先づ汝の眼光を國家といふことょ向けよ。 勿論大日本帝國の京城——文物典章粲然たる輦轂の下に、朝日に輝く赤壁白堊の魔界を存そるは不可なり、吾人は常に之をいふなり。 然れども之わるが爲めに、他の醜業者が海外に發程するは、是非もなき次第なりとは果して何の謂ぞ。 嗚呼何れも是れ悪しきには相違なし、さりながら國体上より見て、何れか重罪なるべき、實に又說破する

を要せざるなり。

〇熱　望

吾人は何卒して醜を外國に鬻ぐの弊風を防がんことを熱望し併せて醜を外人に買ふの弊風を防がんことを熱望す――やんごとなき洋行者に向って

〇病氣見舞狀

弊社の大矢森之助が病氣にて第一醫院に療治中なるよしを、一新機軸を出だせる見舞狀を讀者諸子中より得んことを、自ら前號に廣告せしが、第一に次の如きはがき到着せりと云ふ。

拜啓然者御病人の方より見舞狀の請求には驚入申候尤も是れにて貴兄の御不例を承知いたし乍蔭心痛罷在候乍併右樣の洒落仰せられ候やうにては大丈夫とは存じ候へども千金の御身故一日も早く御全快をと存じ番茶絕ち擂辛絕ち（これは我等大きらひに御座候）してねんじ居候謹言

四月二十五日　店子總代　京の藁兵衛

大矢樣閣下

第二に到着したるは、

一筆啓上仕候御病氣の由驚入候、見舞狀送れとの御請求更に驚き入候今更申すまでにも無之候へ共急げば物を仕損じ申すべく病氣の療治などに於いては最も左樣にて候其れ故世人は一日も早く御快愈をと祈るなるべけれども妾は一日も晩くと只

管八百萬の神々に祈禱いたし居候　可祝

四月二十六日　番町　とし子

大矢先生御許へ

〇投書の儘

「此の腐敗せる道德を如何せんとの投書ありたり。曰く。

此の腐敗せる道德を如何ん、曰く藝妓廢す可し、曰く娼妓廢す可しと、其の說を聽けば堂々乎たり、其の文を見れば整々然たり、其の人を問へば天晴れなる當代の紳士なり、貴女なり、政事家なり、耶蘇教家なり。其の言や正、其の行や善………然れども秦鏡を照らして彼れが肺腑を一々洞見し來らば奈何――咄、正反對！假面をヘゲば概して彼等は僞善家！聞說廢娼論者中錚々の聞に高き政事家否々道德家某氏は、頃日或る宴會に於て北廓進擊の說を主張し、某氏と仲間喧嘩をなしたりと。　又聞く或る地方に於ての女教師は狐變して娼妓となれりと。　余輩は其の說の眞否を知らず、然れども暗夜に食を乞ふて、白晝妻妾に驕るが如き形跡ある僞善家の多々なるを了知す。　余輩は公然遊廓の帳簿に記名するも、口に廢娼さへ唱ふれば其の人實に道德家の如く感ぜらるゝを知る。　嗟乎道德の腐敗、眞個に此の道德の腐敗せるを奈何せんとするや。

源泉濁れり焉んぞ下流の清きを望まん。　眼ある

者は視よ、耳ある者は聽けよ、名古屋の夜會を――疏通式の夜會を。尋常人すら叨りに謁する能はざるやんごとなき皇族大臣始め、其の他貴顯紳士の席へ、彼の賤劣厭ふ可き藝妓は恬然として出現せしに非ずや。狂蝶舞ふ時快と呼び、鶯喉叫ぶ處妙と稱し、加之彼等賤の女は更闌け人靜れるの後、獨り側に侍して握吐の勞を慰し奉るの榮を擔ひしに非ずや。上所好下從之……上流社會に於てすら且つ斯の如し。廢娼か、廢藝妓か、請ふ上流より之を矯正せよ。噫。源泉濁れり源泉濁れり、焉くんぞ下流の清きを望む可けんや。

○輿論ハ何故ニ同胞姉妹ノ不幸ヲ冷眼視スルヤ

備後　無　名　氏

摸倣可なり、取捨其宜を得るに於ては。則ち可なり、然れども目の見る所、耳の聞く所、悉く之を摸倣するに於ては、其害蓋し測るべからざるなり。鉄道可なり、傳線可なり、然れども舞踏不可なり、裸体畫大不可なり。日本人の摸倣は如何？玉石混交、殆んど言に忍びざるものあるなり。一昨年の頃なりき、比耳義に於て、聞くも忌はしき美人品評會なるものを開きたる好事家ありき、當時余輩は其破廉耻なるに驚きたると同時に、其惡風が又もや摸倣好きなる、日本の好事家者流に感染せざるやを憂ひたるに、果せる哉、近日奇怪千萬なる一廣告に接したり。左に其全文を抄錄すれば、

美人評品會廣告

我等茲に品評會を開きて、美婦人を社會に露はすの媒と爲し、慈善市を設けて、孤兒を養ふの資を補はんと欲す。乞ふ美婦人よ來り其美を競ひ、其醜を爭へよ、且世の慈仁なる諸君よ諸君の志を恐み、我等をして其勞を空くせしむる勿れ。

規則摘要、

本會の蒐集する美婦人は東京、神奈川、千葉、茨城、埼玉、群馬、栃木、静岡、山梨の一府八縣を範圍とす。

本會に列せすとを望む婦人は、寫眞(半身寫)に住所、氏名、年齢を詳記し、四月三十日までに事務所へ送るべし。

集りたる寫眞に付き本會審査員評議の上、廿名を撰び旅費手當を給して、五月九日迄に着京せしむ。着京せし二十名の美婦人を上野廣小路上廣亭に集め、五月十、十一の兩日慈善市を開く。二十名の內より三名を撰び、褒賞(甲七十圓、乙五十圓、丙三十圓)を與ふ。殘り十七名へは相當の報酬を爲すべし。

東京市本鄉區金助町廿一番地

美婦人品評會　事　務　所

なり咄！何等の怪報ぞ！余輩は蒐集の範圍內にあらずと雖も、日本民族なる同胞兄弟中に、如斯極大破廉耻なる者あり、同胞姉妹中に如斯極大破廉耻者の玩弄物たるの人あらんとするを見て、對岸の火災視する能はざるなり。當に絶叫疾呼して、滿天下の輿論に訴へざるを得ざるなり。

從來日本人が泰西の惡風を模倣するや、悉く多少の口實をなし、曰く、男女交際の機關、曰く曲線配合の微、曰く美術奬勵、曰何々、曰く何々と、其名の美にして其實の醜なる、實に驚くに堪へたるものありき。然れども今回の計畫の如き、甚しきものは非りしなり。

抑慈善會なるものは、社會道德上進に於て、眞理之を許し、輿論之を許す（現時我國に行はる丶ものを完全無缺と言には非れども）ものなり。然るに今や此神聖なる慈善會も、亦破廉耻者の提燈持たらんとす。彼等言はずや、品評會を開き慈善市を設け、以て孤兒を養ふの資を補はんと。彼等は果して慈善の意義を了する乎。

彼等は如何に熱心なればとて、同胞姉妹をして其權利を失はしめ、其淑德を失はしめ、其品性を失はしめ、之をして全然禽獸界に墮落せしめてまで、慈善を行はんとは餘りと言へば餘りなり。一方に於て育兒の資を得るも、他方に於て同胞姉妹をして禽獸的の苦を得せしむ。

是豈股を割て口腹に満たすものに非ずや。是豈慈善の本意ならんや。彼等真正に慈善家を以て自ら任ぜは、何故に正當の手段に依りて、全國の義俠に訴へざる？　何を苦んで平慈善的の假面を以て衆人を瞞着せんとする？

噫同胞姉妹よ、目前の小利に眩み、爾の貴重すべき身体を禽獣界に墮落し、爾の貴重すべき名譽を全失し、併せて神聖なる大日本帝國の体面をまで損するが如き事ある勿れ！　敢て満天下の輿論に訴ふ、輿論は何故に此怪事を冷眼視するや、何故に同胞姉妹の不幸を未發に救はざるや。

質　疑

○埼玉の林堂君に　袈裟御前が髪洗ひて死したる此髪洗ふ譯は、如何にと問はるれど、何如の者なるや、唯〻叶へは婦人引つくろふには必ず髪を洗ひしなり。　源氏物語若菜上に、紫のうへ明石の上に逢ふ所、明石の君のはづかしげにてましらはんをおぼせは、御ぐしすましひきつくろびてれはする、たぐひあらじと見ゆ、髪洗ふと東屋にも見えたり。　枕草紙心ときめきするもの、かしら洗ひ化粧して香にしみたる衣きたるなどあり。

○安藤よし　定家の秀逸は「あまの原、思へばかはる色もなし、秋こそ月の光なりけれ」、といふ歌なる由なり。

○美作梅谷啓治君　れのころ島は今の何島なりや、との問なれど、元來是等の研究は古事記傳はじめ、皆漠然として空を攫むとき者なれば、縱令ひ阿波逸の某島なり、淡路島なりと論ずるも、皆な岦となすべからず、如かす或は是れ假託せる者なりと解するに。　虹の虫齧は如何なりなど問はるれど、君の如く支那の文字を解剖して、原因を探らんと欲せば、實に限りなきを如何せむ。

○夕山人　赤き書翰袋……綸半切……に請取證かきたりとて仔細あるまじ。

○御茶の水上なる紅葉孃　伊勢物語にある齋官とは恬子内親王の事なり。　文德天皇の御女にて、母は紀名虎が女なり。　品行は如何にと問はれしかど、之を問はれし精神は解するに苦しむ程なり。　れはかたは月をもめでしこれが此の、つもれば人の老となるもの、とは十の七八は花や月をめでゝ、その度かさなれば、年も取る者なり、といふ大意なり。

○向島小梅村頭にすむ婆　次號に於て雑錄欄中詳はしく書きます。

○石　川ＭＳ生　學理的に於て男子も女子も犯罪上之を處分するに嘗り、別に區別するとなし。　花井梅は女子なりとも其罪は恕すべき理なし。　唯〻女子は身体精神ともに柔弱なれば、罪爵は輕かるべしといふ學理は無茶なり、無法なり」。　また女子は男子と法律上同等の爵を受くるといふ事柄は、女子に取りては嬉しかるべしと思ふなり。（法科大學のＮＴ生）

○鳥海孃　文金島田の文金とは、元文元年に文字金鑄られたれば、この時より何にても、文と口癖にしたり、而して文金風とて享保中に尤も流行せしなり。（鬼の庵）

寄　書

○花と風　　大阪　琴水女史

いかなれば、身をまかすらん、咲く花の、
おもふ中とも、見えぬあらしよ。

○浦舟

難波波江の、あしの一葉と、見ゆるかな、
浦なみ遠く、うかぶつりふね。

○夕鐘

さくからよ、花ちる山の、さびしさも、
おもひやらるゝ入相の鐘。

○殘花　　東京・廿醉道人

たった一夜の山風に、はかなく散りし櫻花、
時を得顔に咲きし頃、思ひ出さるゝあはれさよ。
色香を賞て打つどふ、きのふは人の山なせし、
其山さへも今日ははや、何處に人のかげもなく。
見るも恨めし梢には、殘りし花の一二りん、
しげる若葉の間より、うつらふ色をかこちつゝ、
味氣なき世をうらむらん。

○婦人の演說　　拜聽生

只觀ル短矮肥滿ノ怪物、蠕々トシテ壇上ニ躍リ、皎然タル聲ヲ洩シテ、恥カシキ顏ニ當テタル袖垣テハ子退ケテ、精一杯思ヒノ丈ヲ演フルハ婦人ノ演說ナリ。　余輩ハ我國ノ婦人ハ頭ノ天邊ヨリ足ノ爪尖マテ、自已境界万般ノ事物ヲ擧テ男子ニ專任シ、已等兩三相會スレハ、喋々トシテ男女交際、自由結婚ノ利ヲ說クノミ。　而シテ公衆ニ接スルヤ、無言ノ行ヲ學ビ、唯笑ヒノ興ヲ添ユルノミト思ヒ居タリ。　故ニ婦人ノ胸中ニ如何ナル思想ノ鬱勃スルヤ、現今ノ運動ト將來ノ方針トヲ知ル能ハザルヲ常ニ憾トセシニ、今ヤ此報ニ接シ喜バシクモ又悲シク思フナリ。　抑木偶然タル婦人ハ平素懷抱スル所ヲ輿論ニ訴ヘ、自カラ進ンテ男子ヲ籠絡スルナルカ、邪魔スルナルカ其邊ハ憫然ノ至リナレト、若シ耳目ニ新ナル事物ノ現出ヲ以テ、社會ノ改良、人智ノ進步トスバ、是レ亦其一ナルヤ否ヤ。　聞ク三年鳴カザレバ必ス人ヲ驚カスノ鳥アリト、況ヤ婦人演說ノ流行當代ニ始マリシナレバ、衆人ノ驚キハ勿論、膽マテ潰レシナラン。　或人曰ク此鳥ハ信天翁ナレバ、決シテ人ヲ驚サス、却テ人ヲ笑殺スト。　夫レ或ハ然ラン、兎ニ角其說ニシテ聞クヘキアリ、取ルヘキアラバ、ソハ又シモノ事ナガラ、果シテ聞クヘキナク取ルペキナキ時ニハ、婦人ノ價値當代ニ於テ幾何ゾヤ。　是レ婦人諸君ノ懷抱スル所ハ如斯淺識ナリ、如斯無學ニシテ如斯輕噪ナリト公衆ニ自白シテ、殊更ニ婦人境界ノ恥辱ヲ披露スル者ナリ。　他ノ婦人方ノ迷惑幾計ナルヤ、百モ承知二百モ合點ノ上、運動スル生才女ハ、劍術柔術ヲ心得居ル盜賊同然、捕縛ニ困難スルナリ。　余輩ハ斯ク浮輕輕噪ナルハ、皆是レ無學ノ弊ナリト斷言スルニ、躊躇セサル者ナリ。　奈何ナレバ淺キ瀬ニコソ仇浪ハタテ深キ淵瀨ニ浪タヽスト信シ居レバナリ。　猥リニ自已ノ腹ニ鈍刀ヲ推シ却テ視ルモノヲシテ苦痛セシムル勿レ、卿等ハ名ヲ貪リ惻々憫ミヲ買ントスルカ、利ヲ貪リ便々其痛ヲ肥サントスルカ。　啣玉面ノ猿、漫ニ齒甍箱ヲ鳴ス勿レ。

○師範學校女子部の卒業生

安房　秋野喋子

是迄ノ經驗ニヨレバ、師範學校女子部ニ於テハ、奥樣的、御孃樣然タル、否生意氣ナル卒業生ヲ出スコト多クシテ、未タ曾テ真正完美ナル教育家ヲ出スコトナク、且ツ卒業後出テヽ小學教員タルノ年月極メテ淺クシテ、未タ教育ノ大任ヲ盡シ得ザルニ、早ク已ニ婚嫁ノ身トナル者多シ。　然レ𪜈吾人ハ師範學校女子部ノ卒業生タルモノ、悉ク皆奥樣的、御孃樣然タル、否生意氣ナル者ノミトハ言ハズ、又悉ク其就職期限ハ短少ナリトハ言ハズ。　中ニハ或ハ高尚美妙ナル思想ヲ有シ、純潔豐裕ナル腦力ヲ持シ、善ク子女教養ノ重任ヲ空フセスシテ、永久ノ年月ヲ茲ニ費サント思ハル、淑女賢婦モアルベシト雖モ、是レ恐クハ稀有ノ事ニシテ、以テ其普通一般ナルヲ望ム可ラサルナリ。　夫レ子女教育ノ事タル、實ニ邦家ノ基礎ニシテ、其責ヤ重ク、其任ヤ大ニ、隨テ多クノ能力ヲ要シ、多クノ熟練ヲ要シ、多クノ才識ヲ要スルモノナリ。　豈軟弱ナル、非才ナル、無識ナル、少壯淑女ノ能クスル所ナランヤ。　苟モ思ヲ此ニ致スヿナク、漫ニ子女教育ノ大任ヲ委スルニ、軟弱無識ナル少壯婦女ヲ以テセバ、唯他人ノ子弟ヲ傷フテ止マンノミ。　吾人ハ是ニ於テ乎師範學校女子部ノ價値ナキヲ疑ハスンハ非ス、乃チ其不利不經濟ナルヲ疑ハスンハ非ス。　若シ夫レ師範學校女子部ヲシテ無代價ナラシメバ則チ可ナリ、若モ已ニ多少ノ經費ヲ要シ、多少ノ時日ヲ費スカラニハ、其卒業生ヲシテ立派ニ、善美ニ、其有形上ニ於ケルト、其無形上ニ於ケルトヲ問ハズ、十分ノ報酬ヲ成サシメズンバ不可ナリ。　然リ而シテ之ヲ既往ニ徵シ、將來ニ推スニ、其斯ノ如キノ卒業生ニ至ッテハ、斷シテ見ル能ハサルベシ。　吾人ハ妙齡ナル女流ノ、無見識ニ

モ身ヲ師範學校ニ入ルヽヲ怪マズンバ非ルナリ。　夫レ世ノ女子タルモノ身ヲ師範學校ニ入レスンハ、學問ノ出來スト言フ道理アランヤ。　諺ニ世間ハ廣ク、學海ハ濶シ、出テヽ都門ニ遊ブモ可ナリ、入ッテ家庭ニ學フモ可ナリ、豈ニ爭フテ師範學校ニ入ラサルベカラザルノ必要アランヤ。　嗚呼其自カラ好ミモセスニ、或ハ父兄ノ勸告ニヨリ、或ハ師友ノ誘導ニヨリ、好ムトモナク嫌フトモナク、頭ヲ揃ヘ袖ヲ聯ネ、師範學校ニ入リ、空ク地方税ノ厄介トナリ、出テヽ充分ノ責任モ盡シ得ス、退テ碌々爲スヿナクシテ畢ルガ如キニ至テハ、吾人ハ悲シミテモ猶餘リアリト言ハサルベカラズ。



次號には例の大附錄を添ふ

○受驗者必携新刊書廣告

牧野吉彌編著

教育科試驗問題答案

全壹冊洋裝美製本
正價金五十錢
特別賣價四拾五錢但シ遞送費ヲ要セス

出版所
埼玉縣浦和町表門前
中村朝次郎

東京日本橋區大傳馬町二丁目廿二番地
長島恭三郎

大販賣所
埼玉縣北足立郡鴻巣町百十四番地
長島爲一郎

少年文武 第四號 四月十五日發行

●定價金八錢●半年分前金四十五錢●爲替は神田郵便局宛●前金領収の上に非ざれば發送せず

●本號には群齋永濯の忠盛と博觀會行幸圖 ●志賀重昂君の少年敎育案 翎毛之美

中川重麗 元寇顚末 太華山人 普佛戰爭 巴里重園 水百姿 都鄙互報 遊就館の縦覧記 理科日記 昆蟲

聽官●彼岸の遊戯等●自助策 滑稽畫懸賞五會 笑覽會 其他雜報多く附錄 篁東翁の新作 初旅は一回 蕉境に入る（挿畫二十）

●壹號再版出來 見本郵劵八錢

東京駿河臺西紅梅町十三番地

張弛館

矢野龍溪先生戯著

依田學海先生、中江兆民先生、森鷗外先生
森田思軒先生、犬養木堂先生、徳富蘇峯先生評

浮城物語（うきしろものがたり）

洋裝美本和洋折衷畫入●四百八拾餘ページ
●壹册定價金七拾錢●郵稅八錢

右ハ一タヒ出テ世上ノ大喝采ヲ博シ、三絶（奇絶、快絶、壯絶）ノ評ヲ得タル近來ノ奇書ナリ一タヒ之ヲ繙ク者ハ必ス巻ヲ掩フヿ能ハサラム幸ニ一讀ヲ賜ヘ

發兌 東京 報知社 大賣捌 日本橋區大傳馬町二丁目廿二番地 文昌堂 長島恭三郎

福島縣書記官　正六位永峯彌吉君題字
福島縣伊達郡　高橋久右衛門君著
福島縣宇多郡　木村安治郎君訂

養蠶經濟論

洋綴全一冊
郵税共八十五錢

内務次官正四位芳川公序
福島縣半谷清壽君著

養蠶原論

郵税共金一圓

發行所　福島縣福島町十一丁目　進振堂　壹間左右太

增訂第三版出版セリ

伊東洋次郎先生著

繪入　男女必讀

日用家事要法

有益實典

郵税共
賣價三拾錢

發行者　愛知縣名古屋市鐵砲町七十九番戸　三輪文次郎

狀師辻村共之校閲
寺尾卯之助編纂

現行　税法　完

郵税共
實價壹圓
洋裝美本

右四書大阪賣ヲ委賴セラレタリ乞フ四方ノ人士御購求アランコトヲ

大賣捌所　東京日本橋區大傳馬町二丁目二十二番地　長島恭三郎

民法釋義出版豫告

大審院檢事
法律取調報告委員
日本法律學士
佛蘭西法律學士
明治法律學校東京專門學校
日本法律學校講師
從五位 磯部四郎先生著

大日本新典 民法釋義

民法トハ何ゾヤ之レヲ畧言セバ各人相互ノ權利義務ヲ規定セルモノナリ故ニ此交渉頻繁ナル社會ニ安息セントスル者ハ少クモ其大体ニ通セスシテ可ナランヤ然ルニ該新典タル我國古來ノ慣習及ヒ歐州諸國善法中ノ粋ヲ抜キ別ニ一体ヲ成セルモノニシテ正文凡千三百十九條アリ實ニ廣ク法律學ニ達スル者ニアラザルヨリハ其意義ヲ表白スルヿ能ハサルナリ弊堂是ニ見ルアリ切ニ磯部先生ニ乞ヒ細密ニ之カ註釋ヲ施シ適宜冊ヲ分チテ漸次刊行セントス盖シ先生ノ才學文章ハ世夙ニ定評アリ且殊ニ民法ノ蘊奥ヲ極メラレシヿ人ノ能ク識ル所ナレバ此ノ書ノ善良ナル多言ヲ竢タズメ明カナラン右大方ノ人士ニ謹告ス

東京日本橋區大傳馬町二丁目廿二番地
出版發賣所
文昌堂 長島恭三郎
盛化堂 長島爲一郎

明治二十三年五月三日印刷出版

（東京神田區柳原河岸舘巻堂印刷）